

『論考』

首都博物館蔵

「妙峰山進香図」について

松 家 裕 子

はじめに

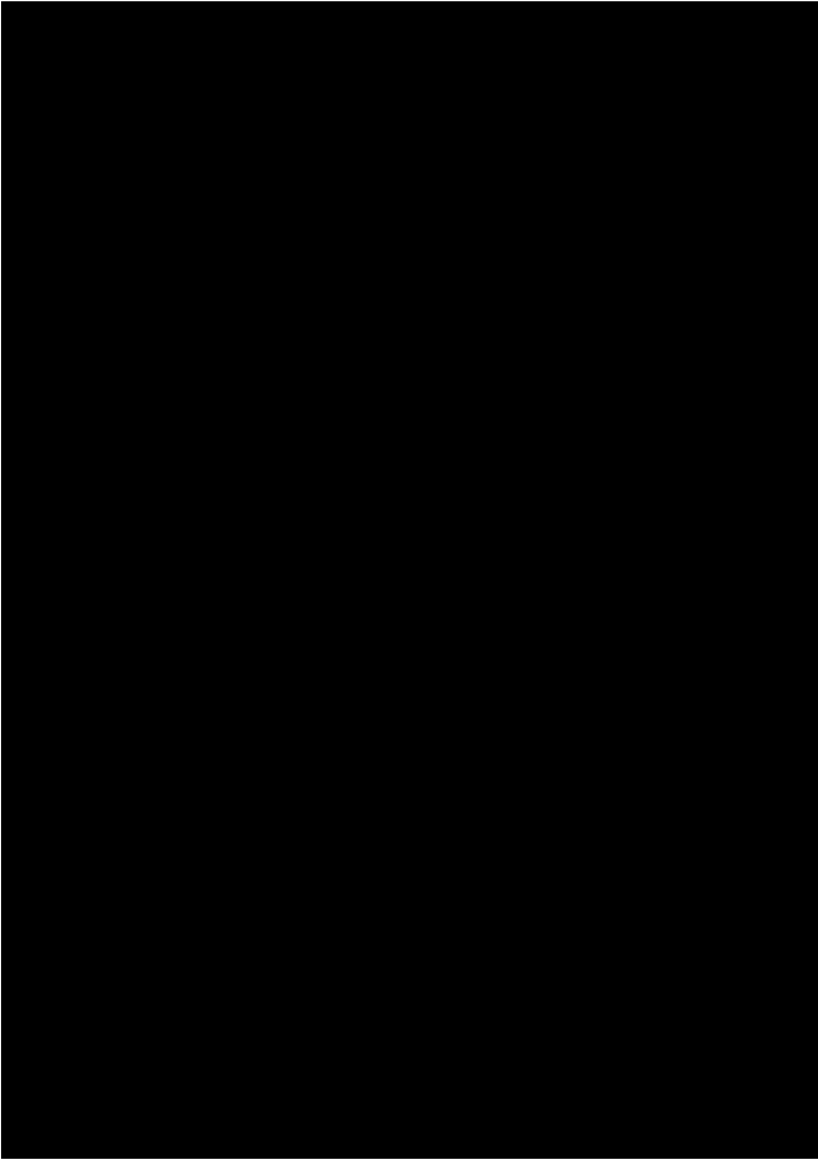
北京の首都博物館に「妙峰山進香図」と呼ばれる一枚の絵が所蔵されている。妙峰山は北京の西北にある山で、山上に中国北方の代表的女神である碧霞元君の廟がある。妙峰山の陰暦四月のまつりは、かつて、北京や遠く天津から多くの人々が押し寄せ、往時の北京を代表するまつりのひとつであった。「進香」は日本語に訳せば「参詣」で、図はまつりの日の参道のありさまを描いたものである。彩色画で、縦一六〇センチ、横一二〇・八センチ。下方およそ三分の一には山のふもとにある大覺寺の門前

のにぎわいが、それより上方には大覺寺から碧霞元君廟にいたる山々とそこを行き交う人々が描かれる。門前は、多くの参拝客や、参拝客に茶・粥・饅頭・酒などを供する人々でにぎわい、また、さまざまな民間芸能が行われている（図一）。

図は軸装されているが、題記の類は一切なく、作者や制作年代、収蔵の経緯を知らせる付帯資料も記録もない。「妙峰山進香図」は、後人によって付された名である。⁽¹⁾

図中の男性が辮髪であることから清の絵であることはまちがいないが、制作年代については、後にみるようにさまざまな説がある。

妙峰山は、中国民俗学史上最初の本格的なフィールドワークの場となったことでも知られている。一九二五年、顧頡剛をはじめとする、北京大学国学門の研究者がまつりに赴いて調査を行い、多くの成果が公表された。⁽²⁾ 妙峰山のまつりは、往時、北京やその周辺に住む多くの人びとの信仰や精神生活に一定の位置を占める重要なものであったはずであるが、中国におけるこの種のことがらの常として、知識人の興味を引かず、文献にほとんど記録されてこなかった。そのような中、新しい知識人である顧頡剛らの行ったこの研究は、画期的なものであった。



图一

ここにとりあげる「妙峰山進香図」もまた、こうした文字による記録の不足を補う貴重な資料である。図中種類も豊かに細かく描かれた民間芸能は、古い時代の主要な娯楽であるだけでなく、中国の文学や芸術の揺籃でもあった。また、図には参拝客も多く描かれて、妙峰山信仰のありようと当時の人びとの精神世界の一端をうかがうこともできる。

妙峰山のまつりについては、多くの図が描かれたと推察される。現在、同じ首都博物館に「妙峰山過会図」一幅、中国歴史博物館に「妙峰山進香図」一幅が蔵され、「妙峰山進香図」とあわせて少なくとも三幅が現存する。首都博物館蔵「妙峰山過会図」は、原寸、作者、制作年代とも未詳、同じく大覚寺を中心に描くが、後に見るように画風などは「妙峰山進香図」と異なる。中国歴史博物館蔵「妙峰山進香図」は、妙峰山のふもとの潤溝村から山上の碧霞元君廟までを描く、縦二〇五・五センチ、横一一四・六センチの淡彩画で、作者、制作年代ともに未詳。これらは、写真で目にするのが可能であるが、いずれも、内容の豊かさにおいて、ここでとりあげる「妙峰山進香図」におよばない。^③

首都博物館蔵「妙峰山進香図」は、管見のおよぶかぎ

り、これまで全容は公開されておらず、これを扱った論文も短いものが一編あるだけのようである。筆者は首都博物館で実際にこの図を目にし、写真を入手するとともに、全容をビデオに収めることができた。そこで、以下、描かれた内容を詳しく見ながら、この図を読んでいたと思う。

第一章 妙峰山のまつりについて

まず、妙峰山の碧霞元君廟とそのまつりのあらましを述べる。これについては、さきに紹介したことがあるので、^④ここでは、「妙峰山進香図」の読み取りに必要なことがらのみ記すことにする。光緒二十六（一九〇〇）年の跋文をもつ『燕京歳時記』の四月の項に、次のように言う。

妙峰山碧霞元君廟、在京城西北八十餘里。山路四十餘里、共一百三十餘里。地属昌平。每届四月、自初一日、開廟半月、香火亟盛。（中略）自始迄終、繼昼以夜、人無停趾、香無断烟、奇觀哉。（中略）廟無碑碣、其原無可考。然自雍・乾以来、即有之、

惜無記之者耳。進香之路、日闢日多、曰南道者、三家店也。曰中道者、大覺寺也。曰北道者、北安合也。曰老北道者、石仏殿也。近日之最稱繁盛者、莫如北安合。人烟輻輳、車馬喧闐、夜間燈火之繁、燦如列宿。以各路之人計之、共約有數十萬。以金錢計之、亦約有數十萬。香火之盛、實可甲於天下矣。

妙峰山の碧霞元君廟は京城を西北へ四十六キロあり、さらに山道を二十三キロあり、計七十四キロありのところであり、昌平県に属する。毎年旧曆の四月になると、一日から半月のあいだ廟が開いて参拝客が押し寄せる。(中略)まつりがはじまつてから終わるまで、人は夜に日を継いで絶えることなく、香の煙の消えることもなく、壯觀である。(中略)廟には碑碣がなく、その起源は知りえない。雍正・乾隆の世よりこのかた存在したらしいが、残念ながら記録がない。参道は年々増えて、三家店からの南道、大覺寺からの中道、北安合(北安河)からの北道、石仏殿からの老北道がある。近年にぎわいでは北道がいちばんで、人はごったがえし、車馬がにぎやかにひしめき、夜ともなれば燈火がそこそこにともって、きらめく星座のようである。各参道

を行く人をあわせると、その数ざっと数十万、動くお金もおよそ数十万にのぼり、その繁盛のさまはまことに天下第一である。

妙峰山の主峰は標高二九一メートル。この山の一〇三八メートルの峰にある碧霞元君廟がまつりの中心である。碧霞元君は道教系の女神で、中国の華北地方の民間で広く信仰されている。出自については諸説あるが、泰山の神、東嶽大帝の娘とする説がもっともよく知られ、中国の他の女神同様、子授けを中心に広く女性にかかわることがらをおもな職掌とする。

妙峰山の碧霞元君廟がいつごろから存在し、どのような経緯をたどって広く信仰を集めるに至ったかなど、その沿革については、『燕京歲時記』にいうように記録が無く、不明な点が多い。『帝京景物略』、『日下旧聞考』、『順天府志』はじめ、明清のおもだった地誌にも言及されない。妙峰山の碧霞元君廟についてわれわれがさかのぼりうる最古の年代は、康熙二十三年(一六八四)年『宛平県志』巻六に引かれる張献「妙峰山香会序」に、「妙峰山天仙聖母」に供えものをしたという「己巳」の年、すなわち明の崇禎二(一六二九)年である。それ以降、

一九二五年の顧頡剛らの調査報告の一つである莊嚴「妙峰山進香日記」（『妙峰山』所収）によれば、康熙十二（一六七三）年の碑が、山上に残されていたという。ただし、二〇〇一年九月に筆者が確認したところでは、山上の碑は康熙二十八（一六八九）年のものが最古であった。『燕京歲時記』に「碑碣がない」というのはなぜか、不明である。

まつりの会期は旧曆四月一日から四月十五日まで、なぜか碧霞元君の誕生日である旧曆四月十八日に至らない。妙峰山の碧霞元君は俗に「照遠不照近」（近在のものでなく遠来の者を助ける）と言われ、信仰をになつていたのは、おもに北京市街、また天津、さらには華北の各地からはるばる訪れる善男善女たちであった。まつりが近づくと、北京の街のそここには、多くの「香会」と呼ばれる信仰組織によって参詣を呼びかける紙が貼られ、北京の風物詩の一つとなつていた。

碧霞元君廟は、五頂と呼ばれるおもな五つをはじめ、北京の市街地にもたくさんあった。それでも人びとがはるか妙峰山まででかけたのは、そのご利益を信じたからにはほかならないが、その背景には、また、地域、時代、そして崇拜神の区別をこえた「聖地巡礼」と春の訪れに

さいして山に入るといふ「春山入り」の習俗があつたと思われる。じつさい、妙峰山は道教系の碧霞元君を主神としながら、仏教僧が住持していたこともあり、また、現在でも、観音菩薩など仏教系の神格を信仰する人が参与するなど、一種の宗教混淆の状態にあつた。「妙峰山進香図」も、その中心は大覺寺である。

まつりは、その後、清朝末期の北京の混乱で急速に人出が減り、一九三七年、日本軍の攻撃によつて堂宇が破壊され、さらに文革期の迷信破壊運動もあり、完全に途絶えていたという。しかし、一九八〇年代半ばから再建がはじまり、九十年代からはまつりとそれを支える香会も復活し、現在ふたたびにぎわいを取り戻しつつある。現在は、宗教専従者はおらず、おもに観光拠点として北京市の当局が管理している。

第二章 「妙峰山進香図」の内容

第一節 山と参道

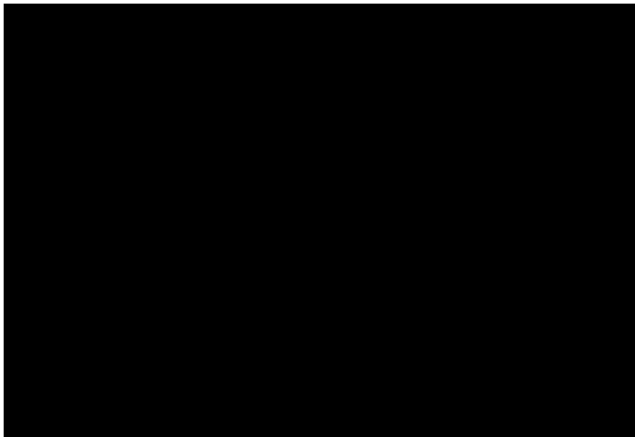
「妙峰山進香図」の三分の二は、先にも述べたように碧霞元君廟にいたる山の風景で占められている。大きく

描かれた大覚寺の山門の後方に、幾重にも山がかさなる。大覚寺の向かって左のわきから、人の列は見え隠れしながらも、とだえることなく山上までつづく。豆粒よりも小さな人びとが、うねうねと険しい山道を行き交う先、図の右上には、香を焚く白煙の噴き上がる碧霞元君廟が描かれる(図二)。現在の碧霞元君廟は、李世瑜らの考証を経て原型に忠実に復元されたということであるが、ここに描かれた廟はたしかに現状と同じように見える。

さきに『燕京歳時記』にあったように、往時、北京の市街地から妙峰山の碧霞元君廟へ行くのには、「南道」「中道」「老北道(あるいは中北道とも)」「北道」四つの参道があった。ここに描かれているのは「中道」である。「中道」の起点は北安河で、大覚寺を経由して山にのぼる。その距離は約十三キロで参道の中では最短であるが、またもっとも急峻な道でもあった。ちなみに、市街地から北安河へは、西直門から北進、海淀を経由して、その距離は約二十五キロであった。

莊嚴「妙峰山進香日記」によれば、莊嚴・顧頤剛ら一行が調査を行った一九二五年の時点で、中道はすでに行き交う人も少なく、後述する「茶棚」もなくなっていたという。

図中、参道のそこそこに、梅らしき花が咲いている。旧暦四月、山にも遅い春が訪れていたのであろう。山を行く人はかなり細かくなっても丁寧に描かれている。上山者と下山者は厳然と区別され、ぼやけた身体からも、



図二

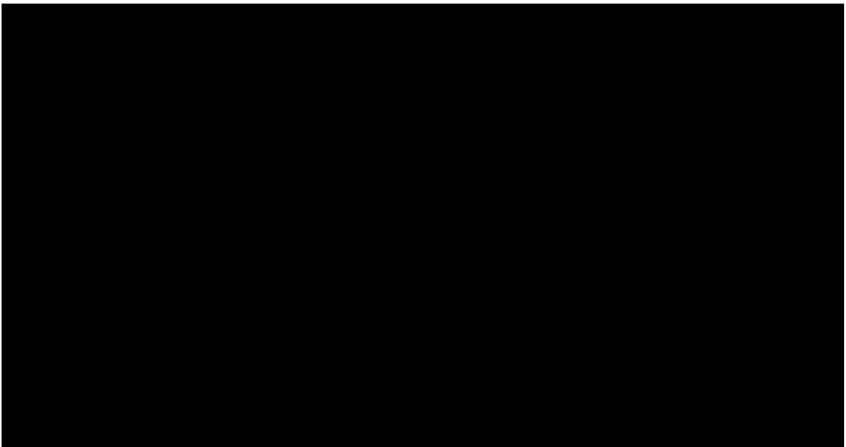
まわりに
参与する
喜びが伝
わってく
るようだ。
山道にも
二、三、
民間芸能
がみられ
るが、こ
れについ
ては大覚
寺門前の
芸能のと
ころであ
わせて見
ることに

する。山の中には、さきに述べた碧霞元君廟のほか、いくつかの建造物が見える。そのうちいくつかは、図中表示(以下「」で示す)がある。下から、一、「協天大帝」の旗の見える建物(図三)、二、「立子臺」(図四)、三、「塞爾峪」(図五)、四、「上平臺」(図六)、五「蘿菠地」(図七)である。碧霞元君廟のすぐ下の二つの建物には表示がない。

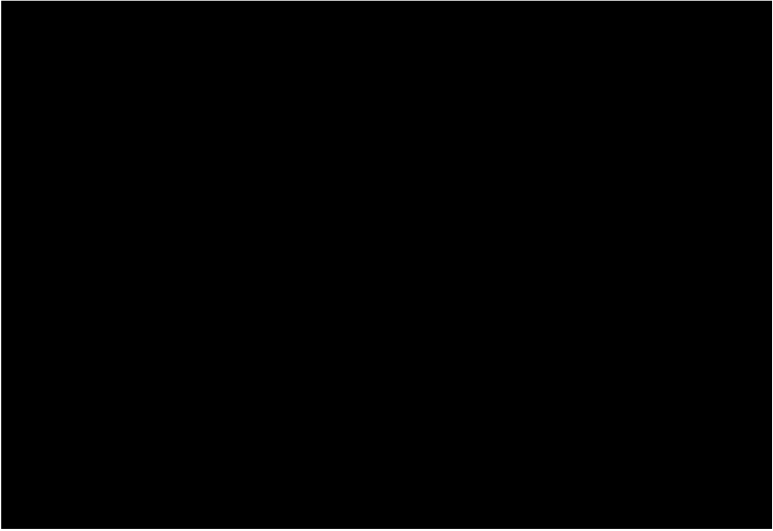
これらの建造物がなにかは、次の二つの資料が教えてくれる。まず、顧頡剛「游妙峰山雜記」(『妙峰山』所収)を見よう。カッコ内の数字は中国里を表し、一里は五七六メートルである。

……便向轎夫打聽各路的重要站口和里数。他們說的如下。(中略) 中道——妙峰——(八)——澗溝——(八)——羅布地——(四)——上平臺——(四)——塞兒峪——(八)——大覺寺——(三)——北安河——共三十五里。北安河至西直門——北安河——(八)——溫泉——(六)——楊家莊——(四)——冷泉——(十)——紅山口——(三)——安河橋——(八)——海淀——(十二)——西直門——共五十一里

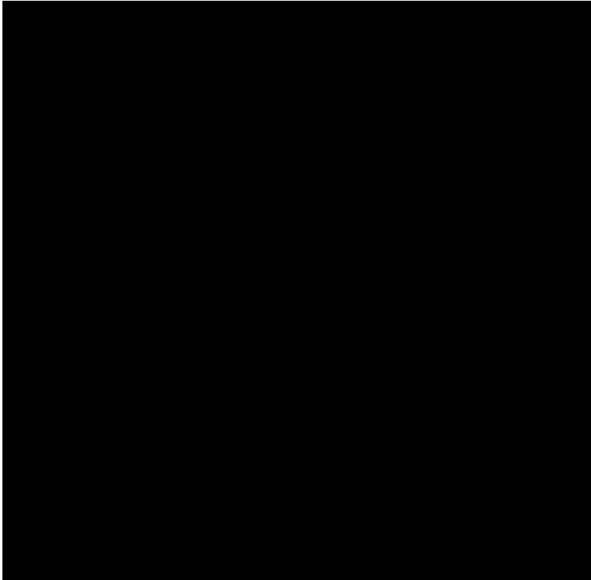
そこで、かごかきの人夫たちに、各參道のおもなス



図三



图四



图五



図六



図七

テーションと道のりを尋ねたところ、こういうことだった（以下訳省略）。

次に、常華「妙峰山朝山進香老北道考察記」『文史資料選編』第五十三輯、一九九六年十二月所収）を見よう。

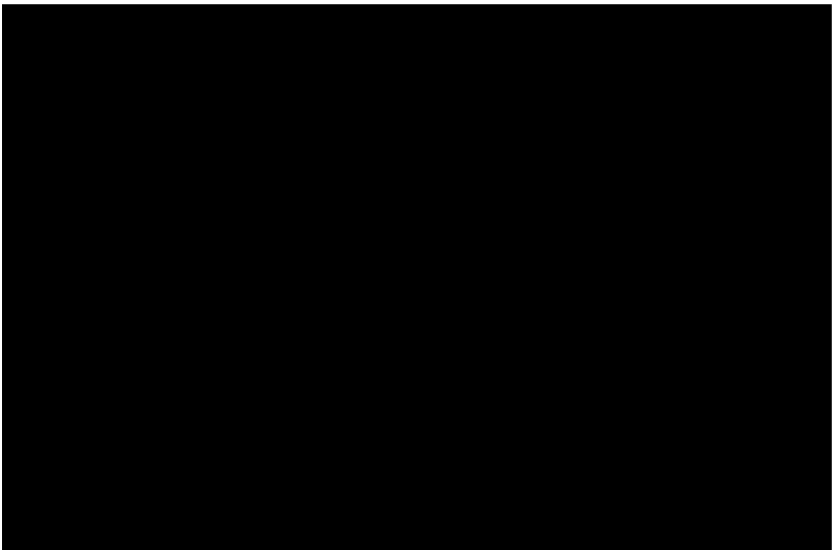
抛現存妙峰山
靈感殿光緒二十
五年石刻文字介
紹、昔日進香山
道主要為四條。
（中略）三 中
道 從海淀区北
安河鄉徐各莊村

開始上山、途經十箇茶棚、依次為…関帝廟、寨兒峪、上平臺、羅卜地、修道路灯会、松棚、三岔澗、回香亭、菩薩殿、喜神殿。

妙峰山の靈感殿に現存する光緒二十五（一八九九）年の石刻によると、昔、主要な参道は四つあったという。（中略）三番目は中道で、海淀区の北安河郷、徐各莊村から山に上り、途中十の茶棚を経由する。茶棚は順に、「関帝廟」、「寨兒峪」、「上平臺」、「羅卜地」、「修道路灯会」、「松棚」、「三岔澗」、「回香亭」、「菩薩殿」、「喜神殿」である。

「羅布地」「羅卜地」が図中の「羅渡地」であり、「寨兒峪」「寨兒峪」が図中の「寨爾峪」であることは間違いない。「協天大帝」は関帝のことであるから、この旗の見える建物は関帝廟に違いない。碧霞元君廟の下、二つめの建物は大きく、その周囲に多くの人家らしき建造物が見える（図八）。これは村落であるとおぼしく、顧頡剛のいう「澗溝」、すなわち澗溝村である可能性が高い。

茶棚は木組みにアンペラがけの中国語の文字通りの「棚」もあったが、特に山中には、このような煉瓦造り



図八

のれっきとした建物が建てられていた。それは、参拝客

が足を休め、香会によって茶・粥など各種のサービスの供応を受けることができる場であったが、また、碧霞元君像が安置された宗教的な空間でもあった。茶棚について、顧頡剛は「妙峰山瑣記序」『民俗』第六十九・七十合期前掲所収）に、次のように記している。

每座小廟——即四年前的驢夫告我的茶棚——又都

擊着磬、唱着喝茶喝粥的歌、廟内外歇着無數進香的人、每到一個人就到神座前、磕一個頭……。

小さな廟——つまり四年前にロバ引きが教えてくれた茶棚——ではどこでも、磬を打ちながら、粥歌・茶歌をうたっている。廟の内と外には無数の参拝客が足を休め、来る人ごとに神座のまえにやってきては土下座をする。

さらに、茶棚の周囲で各種民間芸能の披露が行われたこと、妙峰山の三幅の絵のいずれからも見て取ることができる。

第二節 大覚寺

大覚寺は、陽臺山麓、北京市海淀区徐各荘に現存する古刹である。遼の咸雍四（一〇六八）年の建造にかかり、東面して建てられている。もと、清水院と呼ばれて、金の章宗の八院に数えられ、のち靈泉寺と名をかえた。崇禎八（一六三五）年刊『帝京景物略』巻五 黒龍潭の条にいう。

又北十五里、曰大覚寺、宣德三年建。寺故名靈泉仏寺、宣宗賜今名、数臨幸焉、而今缺。金章宗西山八院、寺其清水院也。清水者、今繞閣出一道流泉是。また（黒龍潭の）北十五里には大覚寺がある。明の宣德三（一四二八）年に建てられた。寺は古くは「靈泉仏寺」と呼ばれ、明の宣宗宣德帝が今の「大覚寺」の名を与えられ、たびたび行幸されたが、今は廃れている。金の章宗に「西山の八院」があるが、この寺はそのうちの「清水院」にあたる。清水とは現在建物をめぐって流れている流泉をさして言ったものである。⁷⁷⁾

また、『日下旧聞考』卷一〇六 郊垈にいう。

〔臣等謹按〕大覺寺、康熙五十九年世宗潛邸時特加修葺、乾隆十二年皇上発帑重修。（中略）殿前碑一、恭刊康熙五十九年世宗御製詩、碑陰恭刊乾隆十二年皇上御製文。明碑一、其陽刻宣宗御製文、宣德三年建、其陰為英宗御製文、正統十一年立。又寺内龍王堂遼碑一、僧志延撰、咸雍四年立。寺旁有僧性音塔。

原 正統十一年三月、命工部右侍郎王佑督工修大覺寺。明英宗実録

〔わたくしども謹んで考えますに〕大覺寺は、康熙五十九（一七二〇）年、世宗雍正帝が即位される以前に特に改築をお命じになり、さらに乾隆十二（一七四七）年、今上皇帝が国費で改築をされたものです。（中略）殿前には碑一基があり、康熙五十九年の雍正帝御製の詩が、碑陰には乾隆十二年の今上皇帝御製の文が刻されております。また、明の碑が一基あり、表は宣宗宣德帝御製の文で宣德三（一四二八）年に建てられたもの、碑陰は英宗正統帝御製の文で、正統十一（一四四六）年のものです。境内

にはまた龍王堂があり、ここに遼の碑一基があります。これは僧、志延の撰になるもので、咸雍四（一〇六八）年に建てられました。寺のかたわらには僧性音の塔があります。

朱彝尊原本に言う。正統十一年三月、工部右侍郎の王佑に監督を命じ、大覺寺を修築した。明の英宗実録（卷一三九）による、と。

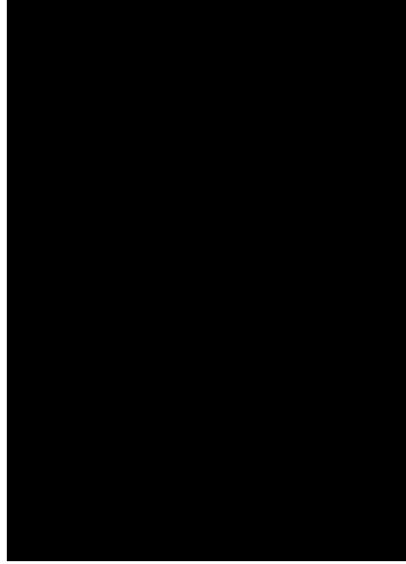
現在、遼の碑から、天王殿、大雄宝殿、無量寿殿、性音の塔まで、大覺寺のおもだった建築物、遺物は、ほぼここに記された康熙・乾隆時の様相をとどめている。⁽⁸⁾「妙峰山進香図」に描かれた山門も、細部は異なるが、現況に近い。図では山門中央の扁額に「大覺寺」と見えるが、現在は「勅建大覺禪寺」と記されている。また、図中、入り口の左右に見える「一山」「善人」の文字は、現在はない。

大覺寺山門の内外は、山門を出入りする人びと（図九）と、右手の小さな扉から出てきたらしいひとりの僧（図十）によってつながっている。山門から寺に入る人びとは、みな火のついた蠟燭をもっており、その向こうに寺の中の大きな香炉が見える。しかし、その他の寺の

建造物については、画面左端に小さな屋根が見えるのは、山門と樹木に隠れるかたちになっていて描かれていない。

これを、首都博物館蔵「妙峰山過会図」のそれとくらべると、目につく相違点が一つある。「妙峰山過会図」では画面中央に大きくはっきりと描かれている白塔が、「妙峰山進香図」にはまったく見えないことである（図十一）。

この塔は、『日下旧聞考』にいう性音の塔で、雍正帝が雍正六（一七二八）年、性音、すなわち迦陵禪師の供



図九

養のために建てたものという。^⑨その由来は、同じく『日下旧聞考』巻一〇六 郊垌に引く乾隆十二（一七四七）年、乾隆帝御製の「重修大覺寺碑文」の一節に述べられている。

康熙庚子之歲、皇考以僧性音參學有得、俾往住持

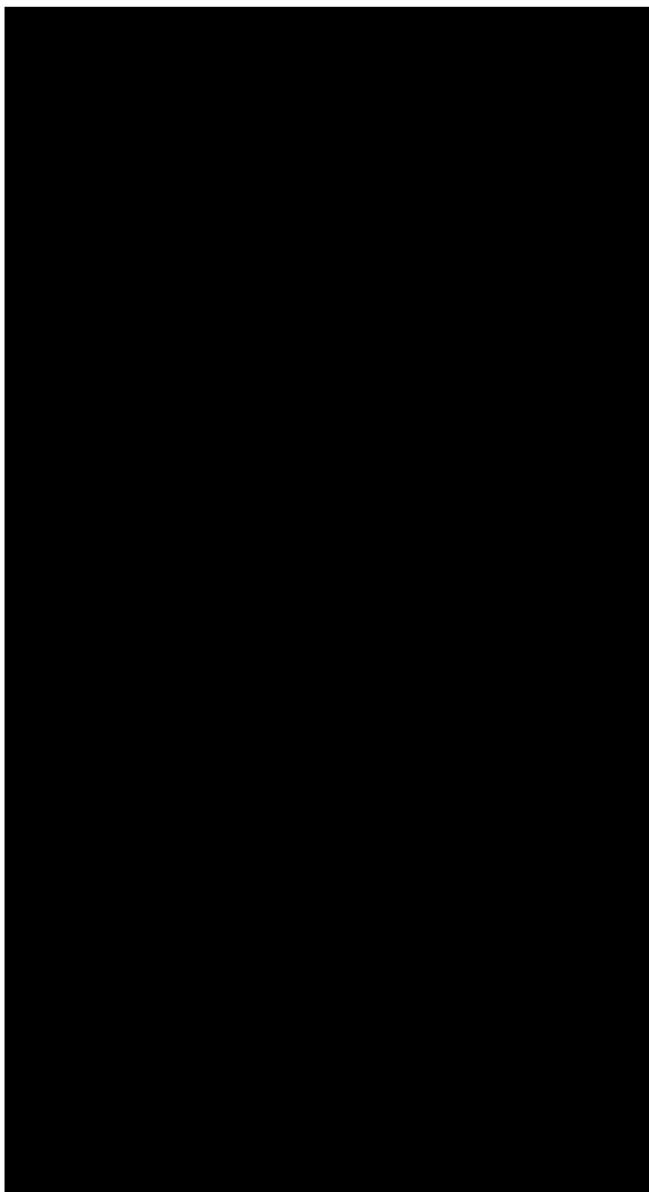


図十

丈室、御製碑文以寵之。及圓寂歸宗、復命其徒建塔於此。慈恩眷顧、聖蹟攸昭。而積歲滋久、丹腹剝落。爰加修葺、工既告竣、勒石以紀歲月。

康熙庚子の歳（康熙五十九（一七二〇）年、亡父

（雍正帝）は僧、性音に教えを受け得るところがあったことから、（ここ大覚寺の）方丈に住持させ、おんみずから碑文を撰してその恩愛を示された。寂滅すると、寺に供養塔を造るようその弟子たちに命じら



図十一

れ、慈愛と恩寵をもって、性音の功績を明らかに示されたのであった。しかし、それから年月がたち、朱も剥落してしまった。よってここに改築し竣工をみたので、碑を造りその日付を刻す。⁽¹⁰⁾

ここには「丹腰」つまり朱というが、現状は白である。高さ十二メートル、八角形の須弥座に円形の塔身が乗り、その上に相輪・水煙がつく。

「妙峰山進香図」にこの塔が描かれていない理由は、二つ考えられる。一、「妙峰山進香図」に描かれているのは、塔が建つまえの大覚寺である。二、「妙峰山進香図」に描かれているのは塔が建ってからの大覚寺であるが、なんらかの理由で塔は描かれなかった。

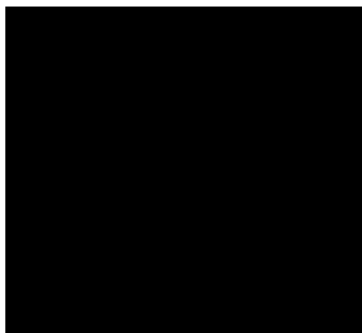
一と考えれば、「妙峰山進香図」の実景年代の下限は雍正六（一七二六）年となり、制作年代をかなり限定することができる。

「妙峰山進香図」の制作年代については、少なくとも三つの説がある。一つは「清末説」で、李澄・孫秀清「首博館蔵《妙峰山進香図》所反映的妙峰山香会習俗」の冒頭に示されているが、根拠は不明である。二つめは「嘉慶二十（一八二五）年説」で、『中国大百科全书』戯

曲曲芸卷の図版十三頁にこの図の一部が掲載され、そこに注記されている。これも、根拠は不明である。三つめは「乾隆年間（一七三六～一七九五）説」で、これは筆者が、首都博物館の葉渡氏から口頭でうかがい、のち書信で確認したものである。根拠はその画風に求められている。

「妙峰山進香図」の制作年代を知るためのヒントと思われるものが図中にあるので、ここであわせて見ておきたい。それは大覚寺門前を行くひとりの人物がもつ香の袋に記された「丁亥年製」の文字である（図十二）。図中あまたある香の袋には多く、「朝頂進香」の文字が記され、それ以外の文字が見えるのはここだけである。当時、香の袋に製造年代を記すことがあったかなかったか、わからない。

しかし、いずれにしても、この「丁亥」は、この図に



図十二

とって何か意味をもった年なのではないか。より具体的には、「丁亥年製」は香ではなく、じつはこの図そのものを指して言っているとは考えられないだろうか。

清の丁亥は、順治四（一六四七）年、康熙四十六（一七〇七）年、乾隆三十一（一七六七）年、道光七（一八二七）年、光緒十三（一八八七）年の五回ある。塔の建造以前ということになれば、順治四年か康熙四十六年だが、順治四年は明滅亡の三年後で、王朝交代の直後に、まつりがこのようなにぎわいを見せたとはあまり考えられないとすれば、残る可能性は康熙四十六年である。これは、先に紹介した三説よりもかなり時代をさかのぼるが、『燕京歲時記』に言う雍正の世まであと十六年で、まったく不可能というわけではない。

とはいえ、やはり問題がある。図中、民間芸能を行う組織の道具入れである「会籠」の二つに「老会」の文字が見えることである。「老会」の名称は、設立後百年を経た会のみが用いることを許されたという¹⁾。もし、図の制作を康熙四十六年だとすると、これらの会の設立は明の万曆三十五（一六〇七）年以前までさかのぼることになる。会によって建てられた山上の最古の碑が、一九二五年の記録でも康熙十二（一六七三）年のものであるこ

とを考えれば、これはやはり早すぎるように思われる。

そこで、塔は存在したが描かれなかった可能性について考えてみる。この場合、描かれなかった理由が問題であるが、たんに実際には見えないから、あるいは描く必要がなかったからということも、「妙峰山進香図」の構図からみて、その可能性は十分にあるう。

以上、塔の有無から、図の制作年代について検討した。ここでは一説として康熙四十六（一七〇七）年を提出したが弱点も多い。これについては、今後の美術史や歴史など、他の分野、視点からの研究を待ちたいと思う。

第三節 各種の民間芸能

民間の芸能は、「過会」、「走会」、「花会」、「武会」あるいはたんに「会」とも呼ばれて、さまざまなまつりや祝いごとにさいして行われてきた。これらは基本的に素人が行う非営利事業であった。中でも、妙峰山のまつりは、とくに過会の盛んなことで知られてきた。『民社北平指南』（李家瑞編『北平風俗類徴』（商務印書館、一九三七

年、上海文艺出版社、影印版）祠祀及禁忌所引）に言つ。

走会又名武会、為民間最熱鬧之雜戲、亦民間有統系之芸術、各種歌舞技芸、五花八門、均有活潑之精神、而不染營利之思想。会中人員、具有堅実勇敢之精神、表演各種芸術、均極精彩、於民間芸術中、佔有雄厚之勢力、每逢山壇廟集開会時、或一村一処有典礼慶賀時、皆舉行走会、而城外各村亦有例年行之者。其為民間調劑芸術者、以妙峰山及左安門外之十里河地方為最盛。由紳董礼請各会表演以助興趣者、如永定門外之中頂、南頂等、觀者均有万人空巷之勢。「走会」はまた「武会」とも呼ばれる。これは、人びとの間でもっとも人気のある芸能であり、また秩序だった芸術である。各種バラエティーに富んだ歌舞・芸能が行われ、いずれも生気みなぎり、しかも營利の思想を持たない。会の人びとは、堅実、勇敢の精神をもって各種の芸能を披露してそのどれもがすばらしく、民間芸術の中でも有力な地位を占める。おまつりが行われるとき、あるいはある村で、ある場所で、祝いごとがあるときには、かならず走会が催され、郊外の村でもまた毎年これを行うところがある。民間で組織されるものとしては、妙峰山と左安門外の十里河の（関帝廟の）まつりがもっと

も盛んであり、有力者がまつりに興趣を添えるため各会を招いて行うものとしては、永定門外の中頂、南頂（ふたつの碧霞元君廟）などがあり、どこも見物人が多く出て、まちには人っこひとり見えなくなる。

また、『燕京歲時記』五月に言う。

過会者、乃京都游手、扮作開路、中幡、橫箱官兒、五虎棍、跨鼓花鉞、高蹺秧歌、什不閑、耍壘子、耍獅子之類、如遇城隍出巡及各廟会等、隨地演唱、觀者如堵、最易生事。如遇金吾之賢者、則出示禁之。過会とは、都の遊び人たちが、開路、中幡、横箱、五虎棍、大鼓会、高蹺秧歌、什不閑（各種の打楽器を一人でいちどに演奏する芸能）、大甕回し、獅子舞などをを行うもので、城隍神の巡行やそのほかのおまつりや縁日になると、あちこちでうたい、おどる。見物人がわんさとおしかけ事件や事故が起こりやすいので、賢明な都の警備の責任者は、おふれを出してこれを禁じる。

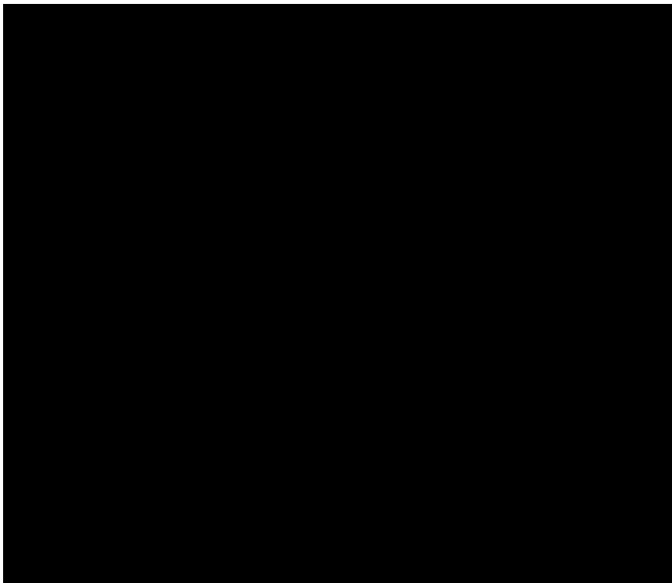
ここに挙げられている芸能のうち、「妙峰山進香図」

には、以下にみるように、什不閑と甕回しを除くすべてが描かれている。過会については、清末、無名氏の『旧京社戯図』⁽¹²⁾をはじめこれを描いた図が少なくない。また、過会は、二十世紀を経て現在も生きており、近人による文献資料もある。以下、これらも参考にしながら、順に見ていく。

一 五虎棍

大覺寺門前中央に、隈取りをした男たちによる棍棒の武芸が見える(図十三)。棍棒が細くて見えにくいのが、これが「五虎棍」、あるいは「五虎少林」と呼ばれる芸であることは、左下の会籠に記された「五虎打路」の文字によっても確認できる(図十四)。五虎棍は、棍棒の武芸をただ見せるのではなく、五虎棍の創始者と伝承される宋の太祖、趙匡胤が柴榮、鄭恩とともに、悪党董家の五兄弟と五虎を討つという、比較的よく知られた故事を演じる。

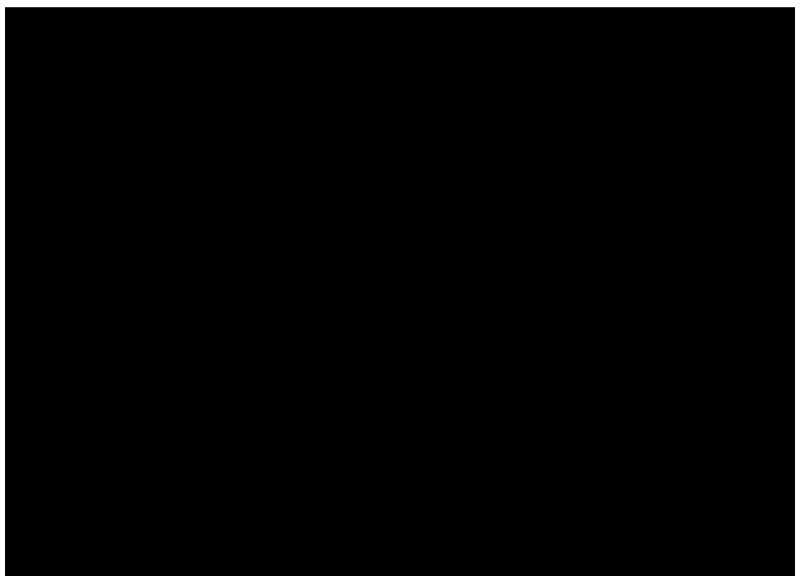
古く『酔翁談録』小説開闢に、「捍棒」の一つとして「飛龍記」が挙げられている。これが、趙匡胤のものであることは、『飛龍全伝』(乾隆三十三年刊・呉璇編)が趙匡胤の物語であることを考えても、ほぼまちがいない。元



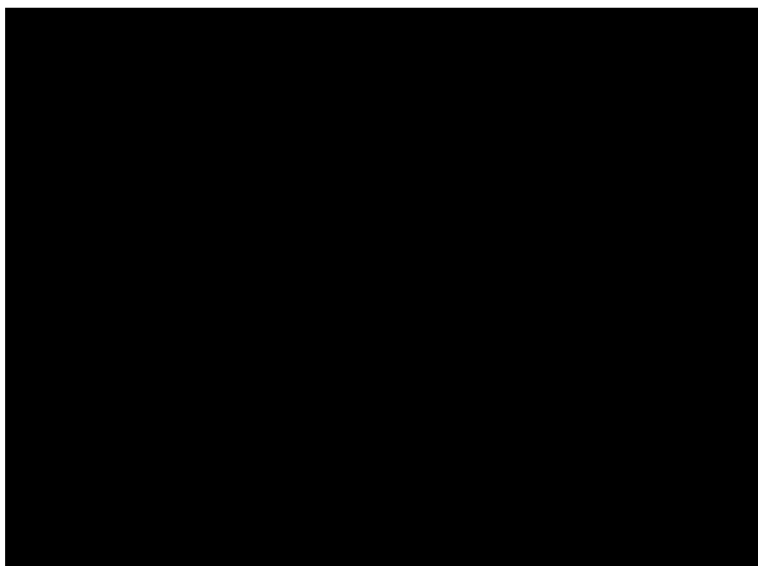
図十三

の雜劇には無名氏『趙匡胤打董達』がある。¹³⁾ そのほか、この故事を扱った戯曲に、李玉の『風雲会』があり、また、京劇「董家嶺（董家橋とも呼ぶ）」、秦腔「打五虎」など広く展開している。清末民初の人、奉寛の『妙峰山瑣記』（国立中山大学民俗叢書、刊行年不明、執筆終了は民国十五年）には、「伝えるところによると、五虎棍は宋の太廟（皇族の祖先をまつる靈廟）のまつりの樂舞だそうである（五虎棍、相伝是宋時太廟樂舞）」と述べられている。

「妙峰山進香図」の画面中央、赤い隈取りが趙匡胤である。『旧京社戯図』の「五虎一堂」には、三人対五人、計八人がすべて描かれている（図十五）が、「妙峰山進香図」には七人しか姿が見えない。趙匡胤の右手後方、ひとり隈取りをせず、ひげもつけない白面の人が柴栄で、京劇などであとに助っ人として登場する鄭恩を欠くものであろうか。五虎のうちは四人はいわゆる「花臉」の隈取り、一人は「小花臉」つまり道化の化粧をしている。かれらからみて左手後方には、銅鑼三、太鼓一、その後方に团扇太鼓のようなもの一人、計五人の樂隊が付く（図十）。その下にも銅鑼を持った三人がいるが、これはその視線の方向から、下の秧歌に属すると推察される。五虎棍の太鼓打ちは演者を注視している。太鼓は中国の



図十四



図十五

伝統的な楽隊においては指揮者役（司鼓）で、演者との呼吸をはからなくてはならない。趙匡胤はいままさにみえをきっており、太鼓にとっても大事な瞬間である。大鼓の右手の銅鑼打ちが左手、太鼓打ちをみているのは、よそみではなく、指揮者である太鼓打ちに合わせるためである。

五虎棍の会では、このほか会籠の担ぎ手二人、会の旗印「会旗」を持つ人が三人、計五人が描かれている（図十四）。写真では色がわからないが、五虎棍の会は、会籠と会旗の色が他と違っている。他の会は青、あるいは黒であるのにたいし、この会は黄色で、しかも龍の文様をもち、会籠には「万寿無疆」の文字が見える。これらは、この会がかつて皇帝の御覧に浴するなど、そのお墨付きをいただいた「皇会」であることを示す。『民社北平指南』（『北平風俗類徴』祠祀及禁忌所引）に、次のように言う。

旗之作藍色者、称藍旗藍幌、黄色者為黃旗黃幌、但黃旗在走会声誉中最称名貴、前清時非曾經聖覽或举賀黃旗者、不得濫用。

旗が青色のものは「藍旗藍幌」、黄色のものは

「黄旗黄幌」と呼ばれる。黄旗は、走会のうちでも簪れのしごく高いもので、さきの清の時代に皇帝のご覧に浴したものと選ばれて黄色い旗を贈られたものでなければ、みだりに使用することを許されない。

また、会籠の担ぎ手の服装も、五虎棍だけは他と異なり、黄色の衣に、白地に赤い房のついた帽子をかぶり、役人風の特別のいでたちである。五虎棍が他の過会を圧して中央に描かれているのは、唯一の「皇会」であったからに違いない。

二 高蹺秧歌

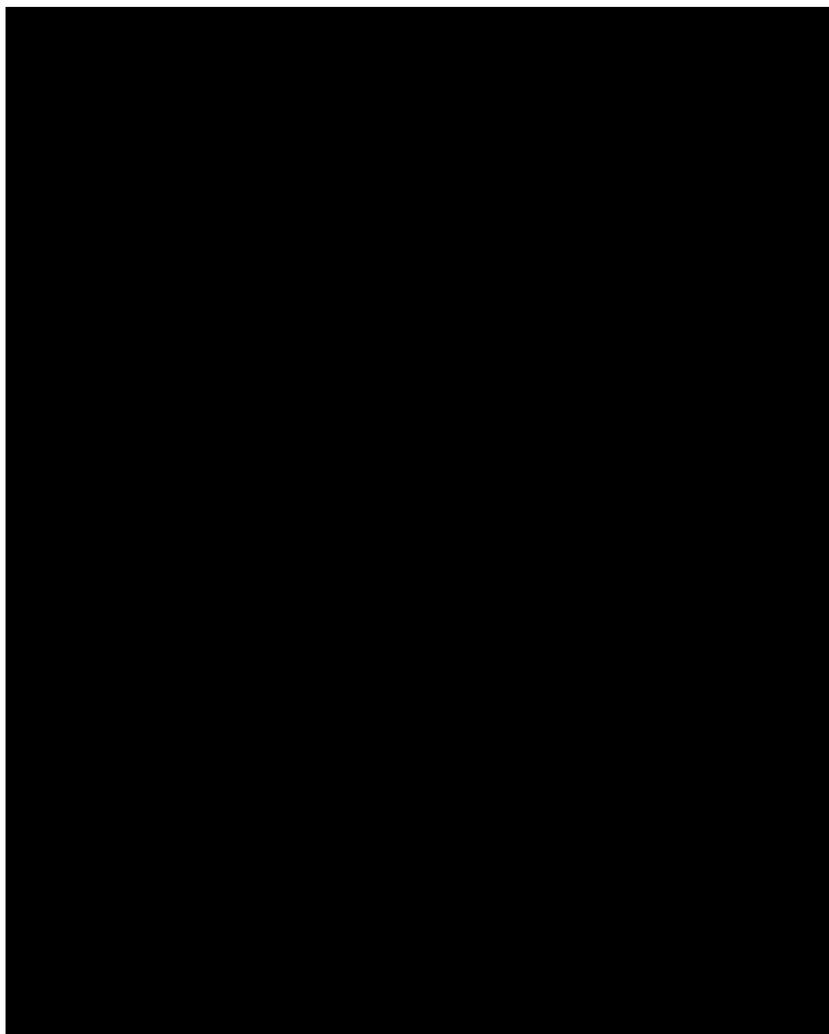
画面右下には、高蹺秧歌が見える(図十六)。画面下と右、二つの会籠に「秧歌」の二字が記されている(図十七)。秧歌は中国北方で広く行われている、豊稜を祈る農村儀礼に発祥する歌舞芸能で、そのうち、この図のように棒にのって行うものを「高蹺秧歌」と呼ぶ。ここには十二人の姿が見える。これら十二の扮装は、北京周辺の秧歌特有の固定した役柄を示している。李景漢・張文世『定鼎秧歌選』緒論(一九三三年)に言う。

北平唱秧歌的人、脚底綁上三四尺高的木棍、叫做『踩高蹺脚』、並且是在街上遊行演唱、主要的脚色、有頭陀和尚、手拿一對木棒、在前引路、一面走、一面打、後辺都按照他打的快慢來走路、他的後辺、有傻公子、傻公子的媳婦、老作子、小二格等角色、所唱的都是短歌、或隨時說些趣話、演些逗笑的動作。

北京で秧歌をうたう人びとのうち、足の下に三、四尺の長さの木の棒をくくりつけるものを「踩高蹺脚」と呼び、うたいながら通りを練り歩く。おもな役柄に「頭陀和尚(行脚僧)」があり、手には一對の木の棒を持ち、先に立ってみなを先導する。歩きながら、(棒を)打ち鳴らし、後に従うものはみなその速さにあわせて歩く。後ろには、「傻公子(金持ちのドラ息子)」とその妻「老作子」、「小二格(三助)」などの役柄が続く。歌うのは短かいうたばかりで、適宜滑稽な話を挿入したり、おもしろい動作をしたりする。

包世軒「門頭溝の秧歌会」(『文史資料選編』第三十八輯、一九九〇年三月所収)は、妙峰山の所在地北京市門頭溝区の現代の秧歌を紹介し、それぞれの役柄についての説明もなされている。また、作者不詳「高蹺秧歌図」(『燕

十六



图十七

都』総三十期、一九九〇年三月裏表紙掲載、所蔵不明）は、首都博物館蔵「妙峰山過会図」に似た画風で、この芸能が鮮やかに描かれている（図十八）。これらも参考にしながら、「妙峰山進香図」の画面左から、その役柄を順に見てゆこう。

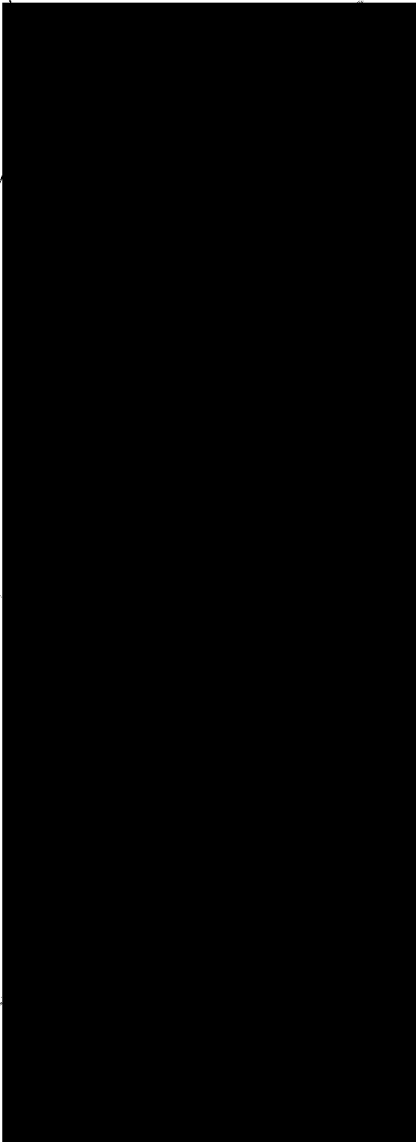
一 陀頭 もっとも目立つ位置におり、行者のさまをしている。両手に太鼓のばち状のものを持って打ち、秧歌の先導・指揮役を務める。『定県秧歌選』緒論（以下『定県』）に言う「頭陀和尚」。

二 小羔 子どものなりをしている。両手にそれぞれ

れ持つものの意味は不明。「高蹠秧歌図」では左手に乗馬のための鞭をもつ。しばしば後出の「公子」と「老坐子」の子どもという設定で現れる。『定県』に言う「小二格」。

三 公子 「武扇」とも呼ばれる。「公子帽（坊ちゃん帽）」をかぶり扇子をもつ。「高蹠秧歌図」では扇に「精気神」の文字が見える。道化（小花臉）の化粧をし、滑稽な役柄である。『定県』に言う「傻公子」。

四 坐子 「老坐子」「文扇」とも呼ばれる。『定県』に言う「老作子」。しばしば公子の妻という設定で現れ



図十八

る。悪婦。公子と向かいあって羽扇をもつ。「妙峰山進香図」では、羽扇ではなく団扇を持っているようだ。

五 樵夫 きこり。坐子の右横で、天秤棒をもつ若い男性。豪傑である。

六 漁翁 漁師。樵夫の手前にいる、竿をもち笠をかぶった白ひげの老人。人格者という設定。「高蹠秧歌図」では、竿は後ろにいる漁婆が持っている。

七 漁婆 漁師の妻。樵夫の左横の女性で、魚を入れるかごをもつというが、画面では確認できない。

八 売薬先生 薬売り。漁翁の後方、「鎮江膏薬」の文字の記された白い布（袋？）を胸にたらし、道化の化粧をした男性。服装は清朝臬官のなりという。「高蹠秧歌図」には見えない。

九 打鑼的 銅鑼打ち。漁婆の右横に見える、銅鑼を持つ二人一組の若い女性である。「妙峰山進香図」ではよくわからないが、「高蹠秧歌図」では、二人がそれぞれ善・悪あるいは美・醜の役割を分け持っていることがわかる。

十 打鼓的 太鼓打ち。打鑼的の手前、太鼓とばちをもつ二人一組の若い男性である。「妙峰山進香図」「高蹠秧歌図」のいずれからも、それぞれが善・悪あるいは美・

美・醜の役割を分け持っていることがわかる。

これらは、すべて男性によって演じられた。

高蹠秧歌の会はかなり大きく、これらのほかに扮装をしない人が多くいて、画面左上方へ広がっている（図十七・十九）。

一 会籠を担ぐ人。二人。会籠には、「秧歌」「老会」「公議」「善」の文字がみえる。□は「高蹠秧歌図」では「楽」に作る。

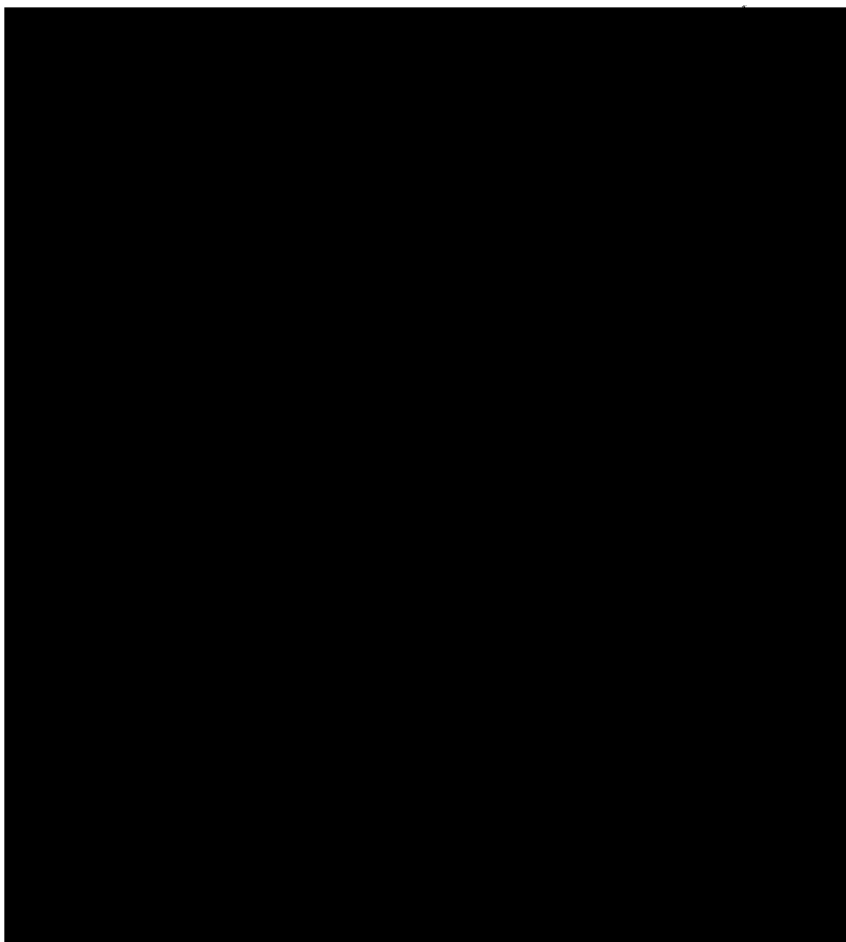
二 会旗を持つ人。会籠の周囲に三人いる。この会の旗は青色である。

三 太鼓の担ぎ手二人と打ち手二人。
四 銅鑼三人。太鼓の上方に見える。

このほかに、小二羔と公子の間に一人、売薬先生の下に上半身だけみえる一人がいるが、役割は不明である。

三 開路

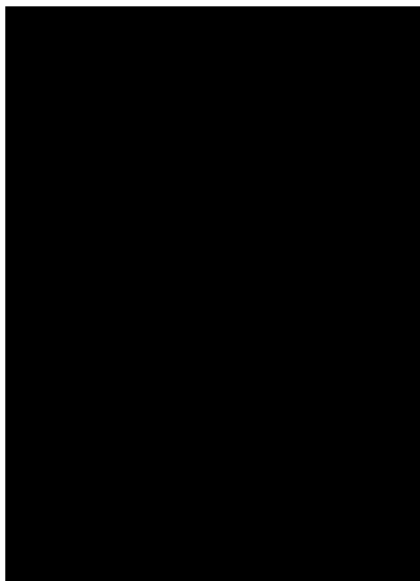
画面左下に見える隈取りをした五人による武芸の披露が、「開路」である（図二十）。図に見えるように又（さすまた）を用いるので、「又会」とも呼ばれる。姚宝蒼「海淀区民間花会」によると、まず五人で演武を行い、次いで上半身はだ脱ぎになって、ひとりずつ順に芸を披



図十九

露するのだという。画面左手に指揮役の小太鼓一人、大太鼓の背負い手一人、打ち手一人、銅鑼四人がいる（図二十一）。大太鼓は端に描かれていてよくわからないが、『旧京社戯図』『開路老会』（図三十二）を見ると、一人で背負っている。「妙峰山進香図」では、演者らの右下に、黒字に白い水玉の会旗を立てた会籠を担ぐ二人が見える。会籠には「開路」「老会」の文字が記されている（図三十三）。

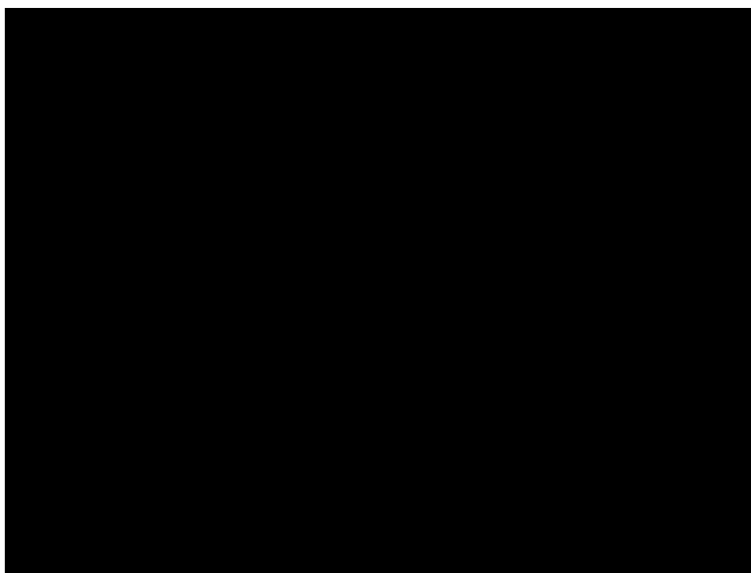
この開路もまた、たんなる武芸の披露では



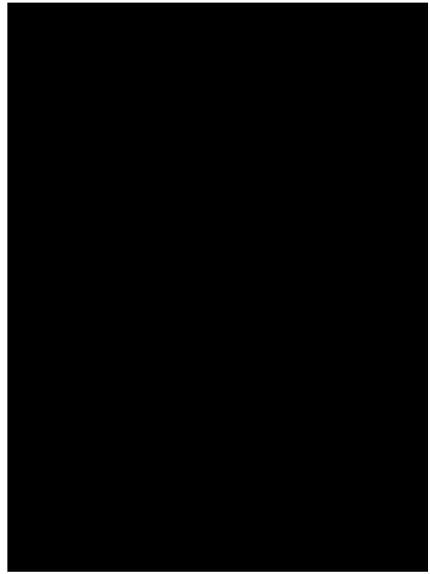
图二十一



图二十



图二十二



図二十三

なく、文学につながる要素を持っていた。孤血「社火概談」(『民俗』第六十九・七十合期所収)に言う。

開路亦有目為係五鬼捉劉氏者、然今日開路中、竟無所謂劉氏、斯則吾不敢謂開路二字、等於「勸善金科」也。

開路をまた「五鬼、劉氏を捉える」であると目する人もいるが、今日の開路にはいわゆる劉氏は登場しない。だから、わたしは、開路は目連ものと同じとまで言おうとは思わないのである。

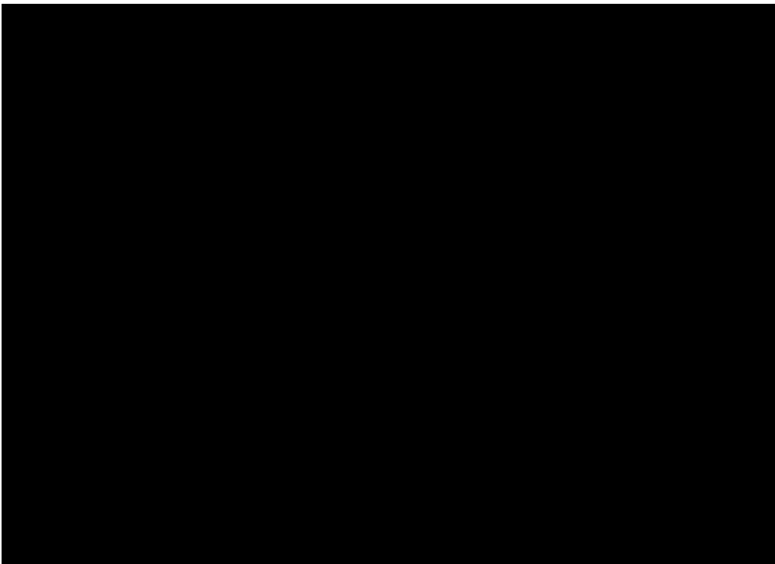
中国では、悪業のために地獄に落ちた母親を、釈迦の弟子である目連が地獄に訪ね、母やそのほか多くの亡者を救う話が、敦煌変文をはじめとするかたりもの芸能、あるいは、目連戯と総称される、各地で盛んに演じられてきた演劇によって、人々の間に広く深く浸透してきた。ここに言う「劉氏」は、目連の地獄に落ちた母親、劉青堤のことである。孤血は、開路は目連ものとはいえないというが、この記録によってわれわれは逆に、開路が目連ものと考えられていたことを知ることができる。

「妙峰山進香図」では、過会は随所で演じられている大道芸のように見えるが、少なくとも現代の報告を読むかぎり、じつは秩序正しく順序立って行われるものであるようだ。これについては、呉効群「妙峰山…北京的香会組織及其“政治”活動」(『民俗研究』一九九八年第二期、一九九八年四月十五日所収)の報告がある。また、二〇〇二年五月、まつりの最終日に山上で筆者が行ったききとり調査でも、前年、ある過会の披露中に別の会がそこを横切って小競り合いとなったが、過会の取りまとめ役のとりなしで事なきを得た、という話をきいた。「開路」という名は、呉効群によれば、この芸が、妙峰山のまつりで行われる各種の芸能の先頭を行ったことによるもの

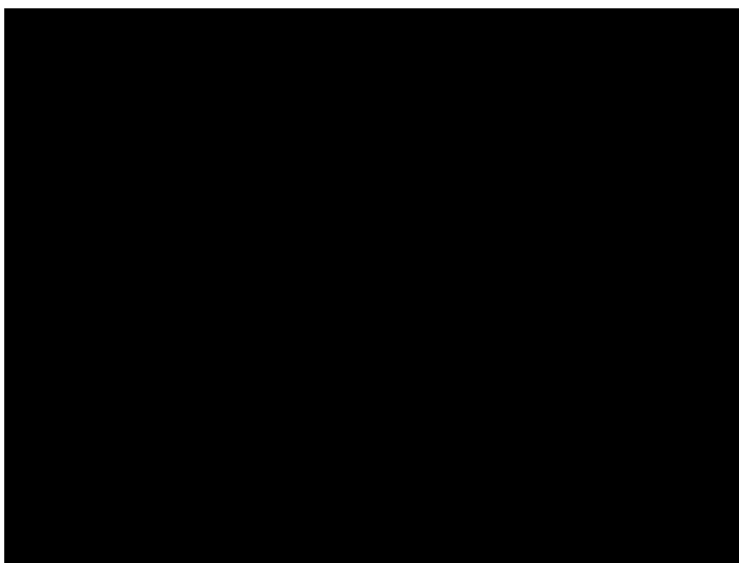
であるという。^⑬このことは、妙峰山の過会が、世俗化したたんなる娯楽ではなく、本来、聖性、宗教性を有するものであったことを示唆するように思われる。

四 槓箱

大覚寺の画面向かって左、山への上り口に、官帽をかぶって赤い官服を着け、左手に扇を持ち、右手に傘をさし、道化の化粧をしたひとときわ目立つ人物がいる。ここから、関帝廟のむこうの白い会旗までが、槓箱の会である(図二十四)。郭子升「北京民間花会」(張紫宸選編『民俗調査与研究』河北人民出版社、一九八八年所収)によれば、この芸能は二人一組になって、二組四人が旗や鈴をつけた大きな箱を棒で担ぎ、これをおもしろおかしく揺らすものであるという。先の赤い服の人物は、道化の化粧に七品官の服を着た「県知事(県太爺)」で、棒に直接またがっており、これに向かって民役の者が直訴を行い、ふたりが滑稽なやりとりをかわす。この様子は、『旧京社戯図』『槓箱老会』を見ると、よくわかる(図二十五)。「妙峰山進香図」では、七品官の下方、青い帽子の人物が上を向いており、これが直訴の民かとも思われるが決められない。七品官のすぐ右横に、「三花臉」の化粧を



図二十四



図二十五

して、麻縄でゆわえた眼鏡をかけた「下級役人（師爺）」がいる。そのむこうには、二組四人が会旗をつけた赤い箱を担ぐのが見える。向かって右の箱の担ぎ手は、赤に白の隈取りをした人物と白面の人物で、なにかの芝居の登場人物でもあるようだが、よくわからない。隈取りの担ぎ手は左手に扇をもち、その横の担ぎ手とともに片手を横に伸ばして、芸を披露している様子である。関帝廟の向こうの箱を入れると数が多すぎるが、これは別隊なのか、よくわからない。

首都博物館蔵「妙峰山過会図」では、横箱の会がもっとも大きく中央に描かれている。七品官と三人の担ぎ手、計四人が扇をもつが、そのうち三面に「工部」の文字が見える（図十二）。また、「万寿山過会図」（『燕都』一九八九年二期裏表紙掲載）では横箱の会籠に「横箱」「兵部」の文字が記されている。これらの意味するところは、先にも引いた孤血「社火概談」によって知ることができる。

控会者之資格 此種資格、可分晰言之。一為城内各衙門作事者、一為郷邨中之有頭臉の人物、間亦有尊官、貴胄、亦間有平民、然終不如各衙門作事者之衆且多也。有六部時各部中当差者、皆自行組織成

会。其原因一以太平無事、一以慈禧時以此邀上寵者頗衆、故大都希上旨而紛紛從事此種工作。如兵部之槓箱、礼部之中幡、翰林院之五虎棍、掌印司之獅子皆其差役者爲之。

会を組織する者の身分　この身分については、次のように分けることができる。一つは市街にある各省庁で現業にたずさわる人びと、いま一つは、農村の有力な人物。ときに高級官僚や名門の子弟、あるいは平民も見受けられるが、しかし、その数は役所の現業従事者に及ばない。六部のあつた時代には、各部の現業従事者はそれぞれみずから会を組織していた。その理由は、一つに天下が太平無事であつたこと、一つに西太后の時代にこうした会によって寵を得ようとしたものがかなり多く、みなはお上からの思召しを求めてわれもわれもこうした活動を行ったのである。たとえば、兵部の槓箱、礼部の中幡、翰林院の五虎棍、掌印司の獅子舞などは、みな当該の役所で実働する人びとが行っていた。

五　大鼓会

立子臺の前に三人の太鼓打ちが並び、赤い服を着た童

子姿の五人が円盤状のものを持った両手を挙げて踊るのが見える（図四）。これは大鼓会と呼ばれる。『民社北平指南』（『北平風俗類徴』祠祀及禁忌所引）に、次のように言う。

大鼓会、又名跨鼓、該会以大鼓以主腦、鼓甚大、上嵌鉄環、擊之喧鑿作響、極爲好聽、旁有童子二排、各執銅鑼一對、互相擊響、有時亦各以銅鑼之單個与他人之鑼任意碰響、頗有興趣。

大鼓会は、またの名を「跨鼓」ともいう。この会は大鼓を中心とする。太鼓はたいへん大きく、上に鉄の環がはめこんであつて、たたくとドンドンと、きわめていい音がする。その横では子どもたちが二列になり、それぞれ銅の小型のシンバル一組を持ち、これを打ち合わせて音を出す。時には、自分の持っている銅の小型のシンバルのうち一つを他の人のものと自由に打ち合わせて音を出すこともあり、とてもおもしろいものだ。

この芸能はまた花鉦、あるいは花鉦大鼓とも呼ばれ、会は鍋子会とも呼ばれる。董秀泉「門頭溝区民間花会舞

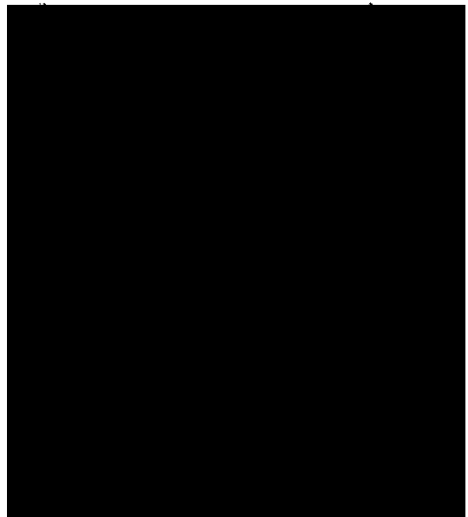
蹈史話」(『文史資料選編』第三十八輯、一九九〇年三月所収)によれば、同区龍泉務村の大鼓会は、十二、三才の子どもが十二人で演じ、銅鑼を二人で互いに打ち合うほか、トンボを切ったり、立ち回りを演じたりもしたという。会旗は立子臺の右に見え、黒地に白い水玉模様がある。その先を黒い会籠が行く。立子臺の左側の白地に赤い縁取りの会旗を持つ人は、下のほうを見ている。ここから少し下ったところに同じ旗をつけた横箱があるから、これはその横箱の会のものであることがわかる。

六 獅子会

山の中腹、寒爾峪の手まえに獅子のかぶりものが二つ見える(図五)。獅子舞の会である。右の獅子は黒色、左は黄色い地に赤い斑点がつく。黄色に赤い縁取りのある会旗二本に先導されている。

七 その他

以上のほか、山中に小さく二種の芸能が認められる。一つは、上から二つめの建造物と三つめの建造物のあいだ、高いのぼりをからだに乗せてバランスをとる人が見える(図一十八)。これは、「中幡」の会である。また、



図二十六

さきに潤溝村と推測したところの広場では綱渡りが行われている(図八)。

第四節 飲食物の供与

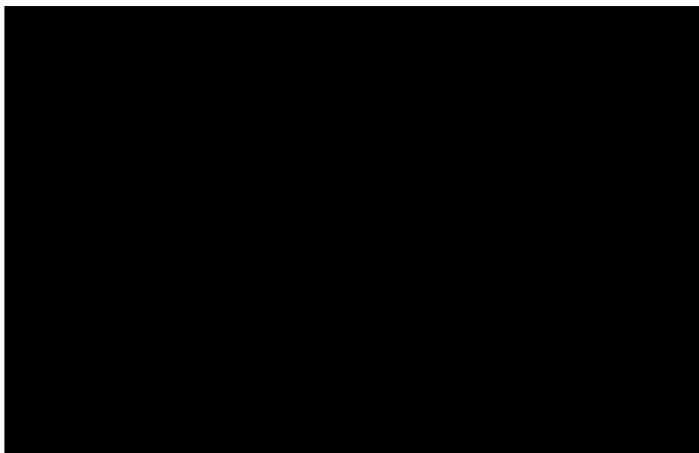
「妙峰山進香図」にはまた、茶、粥、饅頭、酒などを供与し、またそれを受ける人びとが描かれている。これらひとりひとり、みなそれぞれの表情があり、まつりの日の楽しさや喜びをよく表している。

妙峰山のまつりでは、少なくとも清末から民国時代にかけて、茶・粥のほか各種のサービスが、「会」によって無料で提供され、それがこのまつりの大きな特徴になっていた。一九一九年の旧暦四月二日、五四運動がいま起こっている北京の街から、妙峰山のまつりに出かけた修明法師は、そのようすを、「朝拝妙峰山娘娘頂雜記」(『文史資料選編』第三十輯、一九八六年十二月所収)に次のように記している。

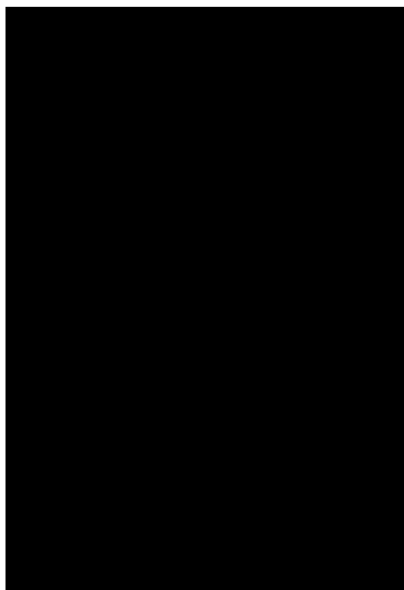
次日登山、沿澗溝、有茶棚多次、無償供給茶水、粥、饅首。縫鞋老会組織的縫鞋站亦為香客義務服務。濃厚的團結虔誠之氣氛充盈全山、宛然別是一番天地。翌日山に登り、澗溝にそって行く。多くの「茶棚」があつて、無料で茶、粥、饅頭を供している。「縫鞋老会」の設置した靴の修繕所も参拝者のために無償の奉仕をしている。團結と敬虔の雰囲気が全山に濃く満ちて、まるで別世界であつた。

顧頡剛らの調査もこの「会」を主要テーマとし、妙峰山のまつり特有の、参拝客相互の連帯感についても、報告の随所で言及されている。

大覺寺の門前向かつて右手、僧が姿をみせたところ(図十)に、茶を供する黒い服の男性が見える。緋毛氈を敷いたテーブルに湯飲みが三個並び、テーブルの横には茶が入っているらしき大きな容器が置かれている。黒い服の男性は、右側、湯飲みをもつ男性参拝客となにかやりとりをしている。この参拝客は先が二またになった木の枝の杖をもっているのので、後に述べるように、参拝をすませた下山者である。反対側からは、わりあい身なりのよい女性の客が、おかわりを要求するか、湯飲みを返すかするために、手をのばして黒い服の男性に湯飲みを差し出している。その右横では、身なりのよい黒い服の男性が僧とことばをかわしている様子だ。また、子どもがひとり、女性の着物の裾に隠れるようにしている。子どもが声をかけたのか、いたずらをしたのか、高蹠秧歌の銅鑼打ちが振り返って子どもに視線をやっている。茶は大覺寺の向かつて左側の建物の前でも供与されている(図二十七)。こちらは黒い服の男性がやかんから注いでいる。その後ろには、おそらく背後の建物から洗った湯飲みを盆にのせて出てきたのだらう、同じく黒い服の男性がいる。テーブルのこちら側の男性は、右手に湯飲みをもって左横の参拝客に茶を勧めている様子だ。



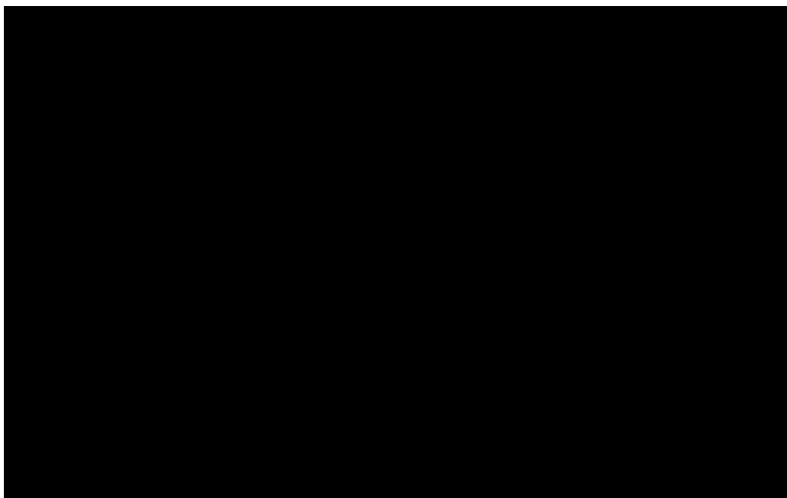
図二十七



図二十八

五虎棍の向かって右に、饅頭を並べた平たいザルを首から下げた黒い服の男性がおり、その左横では一人の男性参拜客が、杖をもたないのでこれから山に上るのであろう、いままさに饅頭をはおばって、幸せそうな顔をしている（図二十八）。右の男性は左手に饅頭をのせて、もう一つ、と勧めている様子だ。ここから、画面をまっすぐ下におりたところにも、饅頭をのせたザルをもつ男性が一人いる。

画面右手には粥を食べる人々も見える（図二十九）。天秤棒で担いできた粥の屋台で、主人が左手に勺をもって

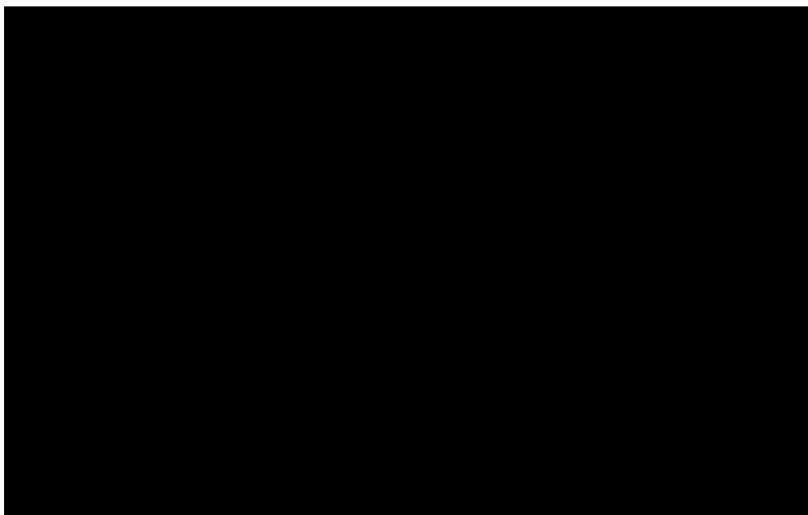


図二十九

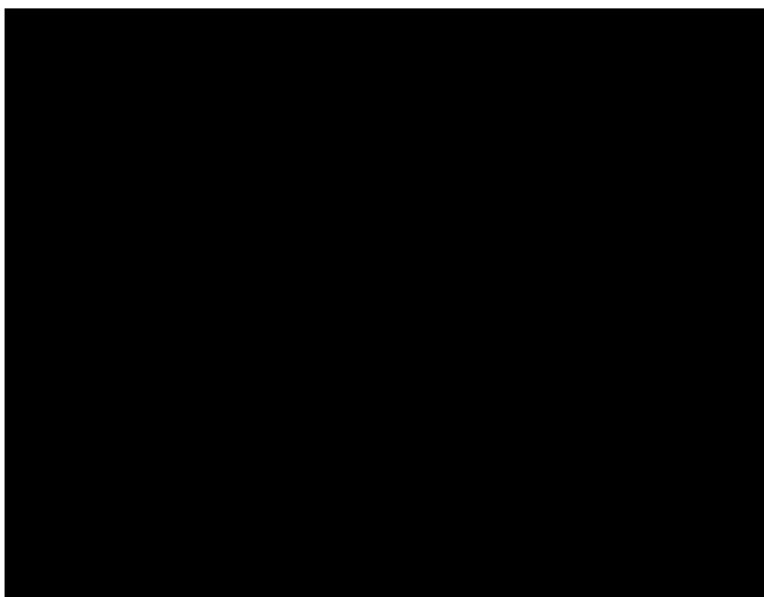
よそっている。左の黒い服の男性はレンゲを手にし、うれしそうに粥を食べている。正面に客がもう一人いて、こちらは右手に箸をもっているように見える。屋台の上方には絵看板（招幌）がかかっている。中央の赤いものは酒、その左の細長い紙の束はふつうは麺類を商うことを表す。してみれば、主人の手前の甕のなみは酒であろうか。⁽¹⁶⁾ 黒い服の男性の後ろには、杖をもって振り返る男性がおり、さらに後方、杖をもち、背中に「朝頂進香」の四文字の入った白い袋を背負った連れらしき男性に、粥を食べようと誘っている様子である。

そのすぐ下には、天秤棒を担ぐ男性が見える（図三十）。箸立てのほか、薬味、漬物などが入ったとおぼしきふたつきの焼物の容器がいくつかのっている。桶の中味は粥であろう。前方から、一人の男性がこれに向かってなにか話しかけているらしく見える。

画面左下に、酒を飲んで一服できる店がある（図三十一）。ここにも絵看板があがっている。黒い服の男性が、食器が並ぶ机に肘をつき酒を飲んでいるようだ。その後ろでは、三人の男性が、下半身は見えないがおそらく腰をかけているのだろう、のんびり談笑している。一人は団扇をもっている。新暦でいえばすでに五月、アルコー



图三十



图三十一

ルも入って暑かったのだろうか。その手前、赤い正方形の紙を貼った壺の中味は酒に相違ない。

図中の飲料や食料の供与が有料か無料かは、よくわからない。ただ、推測を述べれば、天秤棒やざるなどによる行商と、絵看板を上げた粥店、酒店は営利的なものであり、大覚寺前と画面左の建物前、二箇所茶の供与は、安価でもあり、また組織の関与をうかがわせ、無料である可能性が高そうだ。

第五節 参拝客

「妙峰山進香図」には、このほかにも多くの参拝客が生き生きと描かれている。残る二幅の妙峰山のまつりの図とくらべたときにもっとも印象深いのも、この点である。山中、かなり小さくなっても、人間が丁寧を描こうとされていることは先にも述べた。碧霞元君廟へこれから参ろうとする人と参拝を終えた人の描き分けも、きちんとなされている。

民国二十五年（一九三六）年の状況を、莊嚴「妙峰山進香日記」がこう記している。

凡入廟者、見其裹餼糧、携香火、則知為上山、（中略）如見手持木杖、頭戴紅花者、則知為下山。

（茶棚に）入ってくる人々がもし携帯用の食糧と香をもっているなら、それはこれから山に上る人であり、杖を手にし、赤い花を頭に戴いているならばそれは下山者である。

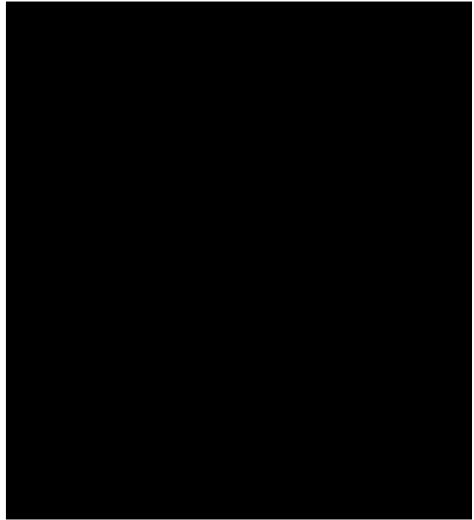
図でも、山上に向かう人は、香の入った袋を持っている。五虎棍の趙匡胤の真下、馬車の向こうにふたり連れの男性がいる（図三十二）。一人は茶色の服を身につけ、もう一人は扇を左手にもち黒い服を着ている。香の袋を、かたや胸に抱え、かたや背に負い、道を急ぐ風である。中国の香は日本の線香と違ってかなり長く、また、いかに何本も束にして上げる。しかも、山上には碧霞元君だけではなく、多くの神々がまつられているので、香はかなりのかさになるのである。

香の袋に多く記されているのは、「朝頂進香（登頂参拝の意）」の文字で、ただ一つ「丁亥年製」と書かれた袋があることについては、先に述べた。売ることあるいは配るのか、たくさん香を網状の袋に入れて背負う人の姿も見える。馬車の馬の鼻先すぐのところ（図三十三）

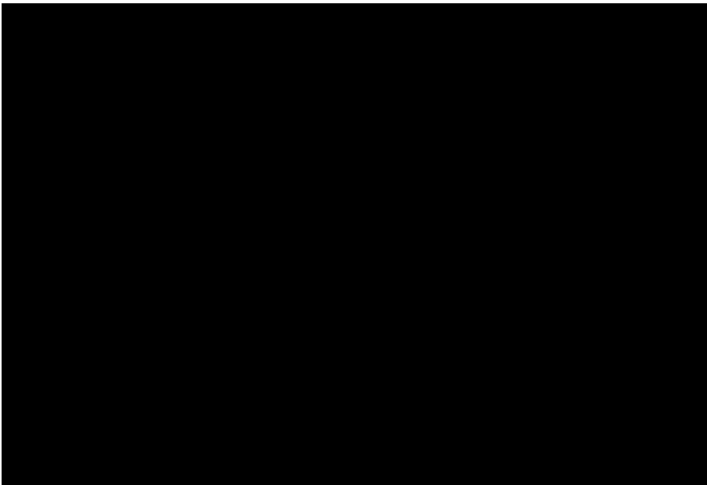
と、大覺寺の門前、画面向かって左側の小さな扉の前、
そして立子臺の手前の三箇所である。

下山してきた人が持っているのは、桃の木の杖（桃木
棍）である（図三十二）。莊嚴の言うように、民国時代には、
妙峰山の参拝客は特有の花飾りを帯びて下山し、これも北京の街の
風物詩の一つになっていた。顧頡剛「妙峰山進香專号引言」（『妙
峰山』所収）に言う。

在這個期間、北京城内外道路上常碰見戴了滿頭紅



図三十二



図三十三

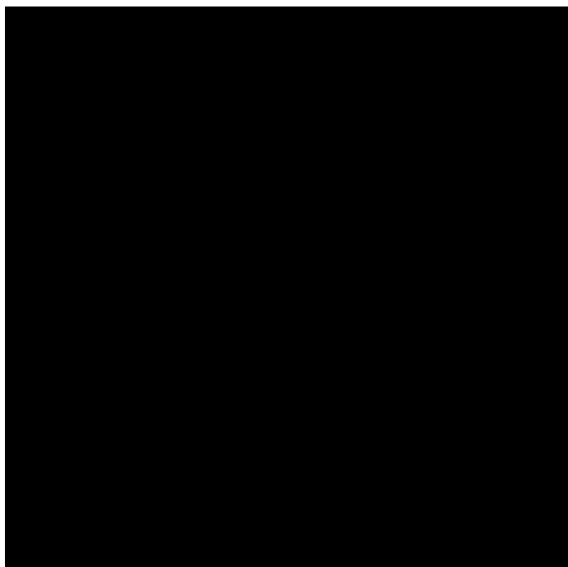
花、支了樹枝作成的手杖而行的男婦們、這即是從那裏進完了香而回來的。紅花是福氣的象徵、他們戴了歸來、喚做『帶福回家』。

この時期、北京城内外の道では、頭いっぱい赤い花をつけ、木の枝を杖にして歩く男女にしょっちゅう出会うが、これは、そこ（妙峰山）にお参りして帰ってきた人々である。赤い花は福を象徵するもので、それをつけて帰ってくることを、「福をもって家に帰る」と呼ぶ。

「福」というのはおそらく俗化したわかりやすい言いかたで、もともと、花は山で得た新しい生命力の象徴だったのだろう。桃の木が生命力を象徴し、聖性をもつものであったことは、正月の桃符などの例があつてよく知られている。「妙峰山進香図」にはこの花飾りは見えない。つまり、この図は、花飾りがあらわれる以前に描かれたものということになる。しかし、花飾りがいつごろから出現したかは、目下不明である。

図中目につくのが、子どもと女性の姿である。子どもは少なくとも八人おり、しかもみなかなり幼い。画面右から、一 赤い衣を着た母に抱かれ、祖母に付き添われ

た子ども。二 このすぐ右横、左手にキセルらしきもの、右手に扇を持つ母に連れられた子ども（図三十四）。母は右方少し先を行く、傘をもった黒い服の男性を注視している風であるから、これが父親か。三 先にも見た、茶を飲む母の着物の裾から顔を出す子ども（図十）。四大覚寺の向かつて左のわきの小扉の前に、赤い服の子ど



図三十四

もが父に負われている（図二十八）。母親は子どもの視線の向かう、その左側、左手に扇を持って正面を向く女性だろうか。五　ここから画面をまっすぐ下におりると、赤い衣の母に付き添われ、父に負われた子どもがもうひ

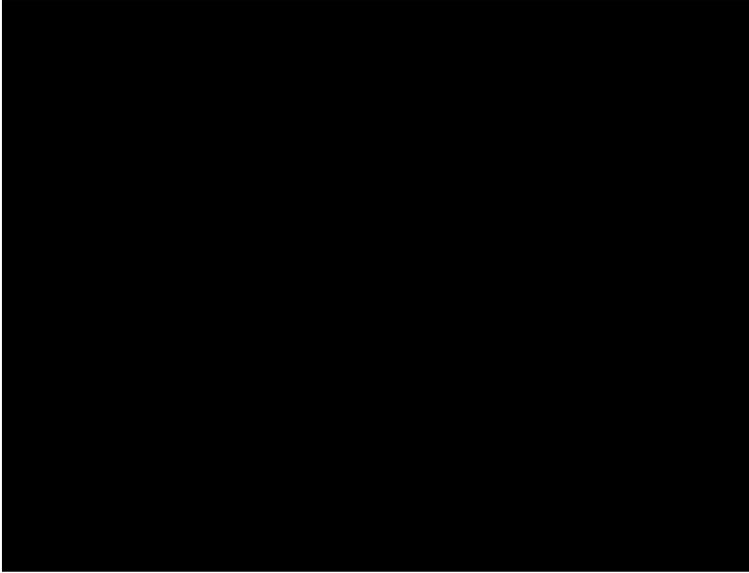


図三十五

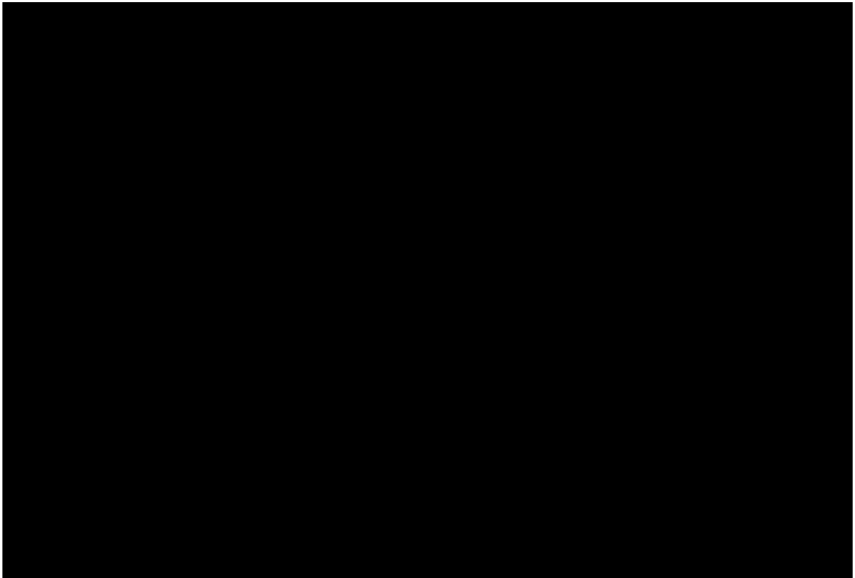
とり見える（図三十五）。六　画面の左端に父に抱かれた赤い服を着た子どもがいる（図二十一）。父は横にいる子どもの母親に、楽しげになにか話しかけている。七　立子臺の少し手前に、横にいる母親と同じ赤い色の服を着た子どもが父親に負われている。八　塞爾峪の手前、興の前に、赤い服の子どもが父親に背負われている。

女性は、これらの子どもの係累以外に、大覚寺の入り口附近これから寺に参ろうとしている赤い服の女性がいる（図九）。左横の男性を見ているから、おそらくこれが夫であろう。またその左下すぐのところに、右横に立つ夫と思しき人物のほうへ目と身体を向けている女性がいる。開路の向かって右横にも女性がおり、右手でなにかを指している様子だ（図三十三）。目線の方向からすると、香売りに向かって話しかけているようにも見える。画面左手の茶を供与するところでは、二人の女性がことばをかわし、また扇を持った女性が右横の杖をもった老人と話をしている（図二十七）。

門前で目につくのは、馬車に乗った女性と（図三十一）、輿に乗った女性（図三十七）である。馬車は一頭立てで白馬に曳かれ、御者と女性が一人が乗る。この女性の顔が窓から見えるだけで、同乗者の有無などはわからない。



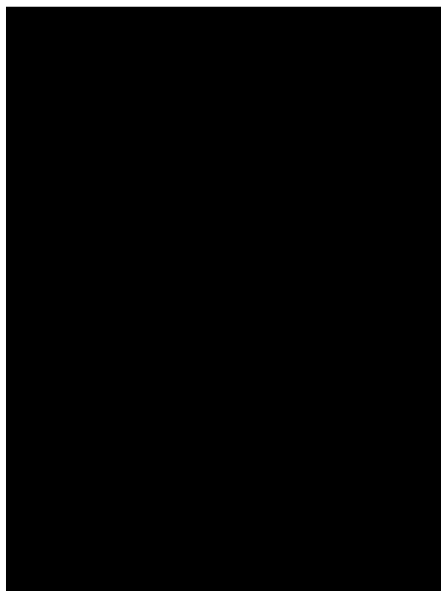
图三十六



图三十七

馬車の横には、役人の出で立ちの男性が栗毛の馬に乗り、後ろを振り返っている（図三十八）。右手には、なにか短い棒状のものを持っていてこれをさし上げているが、鞭だろうか。その後ろには黒い服をきた白髪のお婆がおり、左手に線香の束、右手に火がついて煙のあがる線香をもつて、馬車を追うか、大覚寺へ急ぐかしている。これら馬車の周囲の状況については、不明なところが多い。

輿は四人が担ぐ。乗った女性は傘をさしている。すぐに前に男性の乗る輿が行き、ふたりは同行であるらしく見



図三十八

える。男性の輿の座席は緋色の柔らかそうな生地で覆われて、高級な感じである。

このほか、山のかなり上の方まで、女性とわかる人の姿が少なくない。女性の多くは夫と思われる男性といっしょに描かれている。中国では伝統的に女性の外出が制限され、まつりの図や都市の繁華図などにも、ふつう女性や子どもは姿は少ないか、あるいは皆無である。たとえば、よく知られる「清明上河図」にも、女性や子どもの数は成人男性にくらかなり少ない。では、なぜ、「妙峰山進香図」には、女性や子どもが多く描かれているのだろうか。この説明はそれほどむずかしくはない。妙峰山のまつりは「娘娘（女神）」、つまり碧霞元君のまつりである。碧霞元君の職掌は広いが、そのうちもっとも重要かつ切実なものは子授けであった。ふだん外出を制限されている女性たちも、だから、このまつりには、子授けの願掛けやお礼参りという大義名分を得て、堂々と出かけることができたのである。『妙峰山瑣記』で著者奉寛は、妙峰山へは毎年、幼いころは母と、長じては妻と、つまりかならず女性と出かけたと言っている。また、顧頡剛は、ふだん外出したことのない若い女性が、妙峰山の険しい山道を、神の加護を得たものか、登りきった

ことを記している。

子どもの姿があるのも同じ理由による。いたいけな子どもを連れて妙峰山に詣でるのは、簡単なことではなかったはずである。それを可能にしたのは、信仰の力であつたに違いない。碧霞元君に願をかけて男子を得た夫婦は、子どもを連れてお札参りにやってきたのである。子どもがみな幼いことも、これで説明がつく。

物乞いの老夫婦もいる(図三十九)。身を寄せ合い、左にいる老人が、鉢のようなものを差し出す。老婆は手を



図三十九

あわせて懇願の様子だ。ふたりの足元には黒い犬がいる。こうした人びとは時代や場所を問わずしばしば犬と道連れであるようだ。

また、その少し上に、図中たつたひとり編み笠をかぶり、実か花のついた枝条のものをもち、籠を下げた物売りらしき男性が、何を売るのか、す

るのかよくわからないが、描かれている(図三十五)。

第三章 「妙峰山進香図」

以上、「妙峰山進香図」の内容を、おもに建造物と人物を中心に見てきた。建造物や人物、ひとつひとつ、ひとりひとりが、ここに描かれている意味を明らかにすることをめざした。しかし、不明な点もまだ多いし、また、見落としてもあるであろう。あるいは、清の史料や文書を詳しく調査すれば、さらにいろいろなことがわかるかもしれないが、今回はひとまずここまでとし、最後に、「妙峰山進香図」のもつ意味を、制作動機を中心に考えて、まとめにかえたいと思う。

「妙峰山進香図」は、最初に述べたとおり、縦一六〇センチ、横一二〇・八センチという大きな絵であり、しかも細部まで丁寧に描かれている。これだけのものを作成するには、かなりの時間と労力を必要としたはずである。また、絵の内容からみても、趣味的に書かれたものとは考えにくい。ということは、なんらかの理由でこの図を必要とした人間、つまり依頼主がいたと考えるのが自然であろう。それは、一定の財力を持った個人なり、

あるいは集団なりであつたらう。依頼主の可能性は三つある。一つは妙峰山の碧霞元君廟や大覺寺といった宗教方面の関係者。一つは民間芸能の「会」の関係者。いま一つは碧霞元君を信仰する、財力のある個人、である。

一つめについて、宗教と図像が密接な関係をもつてきたことはよく知られている。特に、唱導にしばしば図像が用いられたことは、中国ならば敦煌をはじめ、また日本ならば地獄絵の絵解きなど、数々の例がある。このような例をここに出すことが適當かどうかからないのであるが、じつは、「妙峰山進香図」をはじめ実際に目にしたとき、わたしはすぐ日本の参詣曼荼羅を連想した。大きさも同じくらいで、両者ともに、社寺の案内図という実用的な性格と、聖地あるいは信仰へ人びとをいざなう宗教的な性格とを、あわせもつ。また、図中に民間芸能が描かれるのも共通している。首都博物館蔵「妙峰山過会図」と「妙峰山進香図」とは、同じように民間芸能が描かれて見るものの目を引くが、しかし、「妙峰山過会図」にくらべると、「妙峰山進香図」では碧霞元君廟や、そこにいたる参道、茶棚、山々を描くことに、はるかに多くの注意と労力が注がれている。すべての茶棚が描かれ、多くには名まえも記されていることは、この図

に参詣の案内図としての性格があつたことを示すのだらう。また、もっとも高いところに碧霞元君廟があり、そこへ向かつて山道を行く人びとを細かに描くのは、この図が、一定の宗教性、聖性を有するものとして制作され、また受け入れられたことを思わせる。¹⁸⁾

制作動機の一つめ、会の関係者が依頼した可能性であるが、これは、中央の五虎棍の会以外の可能性はないだらう。しかし、そうでないとはいえないものの、またそうであると主張できるだけの材料が見当たらない。

三つめ、碧霞元君を信仰する個人の依頼である可能性も、また、ないではない。図中の夫婦はほとんどが子ども連れである。これは、実景を反映したものであろうが、また、この図が子授け祈願のために描かれたためであるとも考えられる。図には、かならずしも描く必要がなかったのではないかと思われる馬車が描かれ、その窓からは女性がちらりと顔をのぞかせている。こうした絵図には、しばしば依頼主がさりげなく描かれるのである。馬車に乗るのは財力があることを示し、しかも、これが目につくように、けれども、姿はちらりと見える程度に描かれている。依頼主があつたとすれば、馬車の女性などその有力候補の一人になりそうである。

本論文中に比較のために挙げたいいくつかの絵画にしても、康熙帝の八旬図などの慶祝図や風俗図にしても、あるいは美人画にしても、清の絵画は、概して人物の表情や動きが類型化されて変化に乏しく、あまり生気が感じられないように思う。そのような中であって、「妙峰山進香図」に描かれた人びとは、みな「生きている」。ひとりひとりをよく見ると、それをますます強く感じる。人びとは、みな、かならずだれかを見ている。そして、何かをしている、あるいはしようとしている。調査、執筆の過程で、くり返しこの図の、現物、映像、写真を見たが、見飽きることがない。「妙峰山進香図」を魅力的なものにしているのは、おそらく、神にたいする、そして、人間にたいする信頼感なのだろう。そして、それは、この図の作者の心性であると同時に、妙峰山のまつりのもつ心性でもあったのだと思う。

絵画や清の歴史の専門家ではないにもかかわらず、奮ってこの論文を書いたのは、図を見たものとしていささかでも責務を果たそうと思ったのと、この図をひとりでも多くの人に知ってもらいたいと思ったからである。図の閲覧に当たっては、首都博物館事務室主任の劉玉敏氏にお世話になった。また、副研究員葉渡氏には、

論文中に言及したことも含め、いくつかの貴重なご教示をいただいた。また、撮影員谷中秀さんは時間をかけて美しい写真を撮影してくださった。みなさんに、この場をかりて感謝の意を表したい。撮影はあくまで研究用であり、写真を公表することが目的ではないという約束をしたため、今回図版はすべて白黒で、画面も不鮮明であって、「妙峰山進香図」が知られるようになり、全容が公開され、また図と妙峰山のまつりについての研究が進むことを願ってやまない。

注

(1) この図は、「妙峰山廟会図」とも呼ばれる。『中国大百科全書』戯曲・曲芸巻（中国大百科全書出版社、一九八三年）に、この図の一部が掲載され、そこには「妙峰山廟会図」と注記されている。「廟会」はまつりの意である。首都博物館副研究員葉渡氏のご教示にしたいが、本論文では「妙峰山進香図」の名称を用いる。

(2) 顧頤剛らの研究は、顧頤剛編著『妙峰山』（国立中山大学語言歴史学研究所、一九二八年、上海文芸出版社、一九八八年影印版）、および雑誌『民俗』第六十九・七十四期合刊「妙峰山進香調査専号」（一九二九年七月二十四日、上海書店、一九八三年、影印・合訂版）に

まとめられている。

- (3) 『妙峰山過会図』は、雑誌『燕都』総二十九期(一九九〇年一期)裏表紙にカラーで鮮明な写真が掲載されている。中国歴史博物館蔵「妙峰山進香図」は、劉錫誠主編『妙峰山・世紀之交の中国民俗流変』(中国城市出版社、一九九六年)の見開きに白黒で写真が掲載されているが、かなり縮小されていて、おおよその感じがわかるだけである。後者については、同書に李露露「清代『妙峰山進香図』という、短かい論考が収録されている。

- (4) 李澄・孫秀清「首博館蔵『妙峰山進香図』所反映の妙峰山香会習俗」(『妙峰山・世紀之交の中国民俗流変』所収)参照。

- (5) 松家裕子「妙峰山のまつりと粥茶歌」(『アジア文化学科年報』第五号、二〇〇二年十一月所収)参照。

- (6) 妙峰山信仰の歴史について、Naquin, Susan, "The Peking Pilgrimage to Miao-feng Shan: Religious Organizations and Sacred Site," *Pilgrims and Sacred Site in China*, edited by Susan Naquin and Chun-fang Yu, 333-377, University of California Press, 1992 が詳しい。

- (7) 『日下旧聞考』巻一〇六 郊垌にも『帝京景物略』が引かれるが、字句に若干の異同があるのて引いておく。黒龍潭北十五里曰大覺寺、宣德三年建。寺故名靈泉、宣宗易以今名、数臨幸焉。今圯矣。金章宗西山八院、寺、其清水院也。

- (8) 北京西山大覺寺管理処『大覺寺』(北京燕山出版社、二〇〇一年)による。また、筆者も二〇〇二年五月、寺を訪れて確認した。

- (9) 『大覺寺』前掲による。

- (10) 『大覺寺』前掲によれば、迦陵禪師は法号を性音という。若くして杭州で出家、臨済宗に入り、のち北京の柏林寺に移ってその住職となり、雍正帝と親しく交わるようになって大覺寺に住持したものの、雍正帝即位後は、はるか廬山の隱居寺に辞去し、四年の後にその地で寂滅した。雍正帝は、「国師」の称号を追賜し、「円通妙智大覺禪師」のおくり名を賜って、遺骨を大覺寺に招来し、性音の高弟仏泉を大覺寺の住職に任じ、これに命じて供養等を建造させたという。

- (11) 以上傍点は雍正四年十二月八日の上諭によって確認可能なことが示す。また、『西湖志纂』巻四には、康熙帝が康熙五十三(一七一四)年に杭州の理安寺を重築し、性音をここに住持させたことが記されている。顧頤剛「妙峰山の香会」(『妙峰山』所収) 王小隱先生告訴我、他在本京朋友处打聽、知道一個香会必須經過一百年、方可改「聖会」為「老会」。

- (12) 以下、『旧京社戯図』の写真は、廖奔『中国戯劇図史』(河南教育出版社、一九九六年)による。

- (13) 雜劇では、趙匡胤らが倒すのは、董達ら三兄弟である。『脈望館鈔校本古今雜劇』による『趙匡胤打董達』のあらすじは次のとおり。趙匡胤と義兄弟の鄭恩の二人が、関西五路への旅の途上、傘を売る柴栄に出会い、

三人は義兄弟となる。ある村に来ると、董達とその弟、単潮虎、歪蹄虎、計三人が橋を占拠し、通行人から不法に金を取っている。三人が不在のうちに趙匡胤らが橋を渡ると、これを知って、まず、単潮虎、歪蹄虎が柴栄を殴り、こんどは逆にこの二人を趙匡胤と鄭恩が殴る。話をきいた董達は趙匡胤らを追い、まずひとり宿に残っていた柴栄を殴って、傘とそれをつんでいた車をめちやくちにする。宿にもどった趙匡胤と鄭恩は怒り、棍棒を持ってやってきた董達らに挑みかかって、董達を殺し、三人の棍棒を奪う。これをきいた董達の父、董太公は、単潮虎、歪蹄虎とともに、趙匡胤らを追って来るが、三人に殺される。柴栄、趙匡胤、鄭恩の三人は、柴栄の叔父、郭彥威に取り立てられる。包世軒「門頭溝的秧歌会」(以下「包」と姚宝蒼「海淀区民間花会」(『北京文史資料』第五十八輯、一九九八年十月所収)(以下「姚」)には、それぞれの役柄について、さらに次のような説明がなされている。

一、陀頭「包」ムカデの精、「姚」「水滸伝」の魯智深あるいは武松の扮装。二、小二羔「包」ヤモリの精、「姚」「二哥」とも呼ばれ「水滸伝」の張青の扮装。三、公子「包」蛙の精、「姚」「水滸伝」の王英の扮装。四、坐子「包」なまずの精、「姚」狐の精で「水滸伝」の扈三娘の扮装。五、樵夫「包」青石の精、「姚」「水滸伝」石秀の扮装。六、漁翁「包」白石の怪、「姚」「打漁殺家」の蕭恩の扮装。七、漁婆「包」貝の精、「姚」「打漁殺家」の蕭恩のむすめ、蕭桂英の

扮装。八、売菓先生「包」スッポンの精、「姚」タニシの精で「水滸伝」の安道全の扮装。九、打鑼的「包」小エビの精、「姚」「俊鑼」はウワバミの精で「水滸伝」の孫二娘、「丑鑼」は蠍の精で「水滸伝」の顧大嫂の扮装。十、打鼓的「姚」「俊鼓」は虎の精、「丑鼓」は猿の精で「水滸伝」の時遷の扮装。

さらに姚宝蒼によれば次のような伝承もあるという。韓家川和西北旺高跷表演的是十二個精霊捉拿張天師的故事。在一次旧曆三月三日的蟠桃会上、金花娘娘喝醉了酒、丢了鞋、張天師羞辱了款、于是款糾集了十二個精霊去拿張天師。

吳効群「文化的衝突与較量——北京妙峰山碧霞元君信仰与天津」(増版『二十一世紀』、二〇〇三年四月三十日所収)。

(16)

(17)

「老北京店舖的招幌」(博文書社、一九八七年)参照。参詣曼茶羅については、大阪市立博物館編「社寺参詣曼茶羅」(平凡社、一九八七年)、和歌山市立博物館「〇二秋季特別展 参詣曼茶羅と寺社縁起」(二〇〇二年)など参照。

(18)

妙峰山にかかわる唱導の芸能は、現在知りうるかぎりでは残されていない。ただ、清の北京には「奥さまの妙峰山詣」という、ある女性が南道をたどって妙峰山に詣でる逐一をうたう「馬頭調」の長編の俗曲があり、その歌詞が李家瑞『北平風俗類徴』に紹介されている。

1 補

本稿脱稿後、京都大学人文科学研究所小南一郎教授のご教示により、范華 (Patrice Fara) 著、陳巴黎・燕漢生訳『妙峰山行香走会』(『法国漢学』第七輯、中華書局、二〇〇二年十二月) のあることを知った。これは「十八檀香会図」(本論文中の『旧京社戯図』と同じもの) を挙げながら、妙峰山と香会とについて述べた五十頁に及ぶ論考で、内容的に本論文と重なる部分も多く、豊富な実地調査から得られた情報には有用なものが少なくない。時間と紙幅の制約により、本稿にこれを反映させることは断念したが、次の二点についてとくに補足・訂正しておきたい。

・本論文十六頁、康熙四十六(一七〇七)年に「老会」というのは不都合かもしれないとした部分について、范

2

華論文によれば、妙峰山碑中、道光十六(一八三六)年に重刻された康熙二(一六六三)年の碑の拓本に「老会」の字が見えるという。また、創設後百年を経ずとも会に「子」ができれば「老会」を名のることができたと述べている。「老会」の文字が重刻のさいに加えられたものでなければ、康熙四十六年に「老会」があっても不都合はないことになり、図の制作が康熙四十六年である可能性はふたたび浮上する。

・本論文三十二頁、図八の芸能を「綱渡り」としたのは「棒渡り(槓子)」であろう。

本論文二十八頁、「開路」の由来について、「開路」はすなわち「方相氏」であるとされてきたこと、たとえば『三教源流搜神大全』の「開路神君乃是周礼之方相氏是也」などから知ることができる。